

Sa skya paṇḍita's Theory of *Pramāṇa*

—— With reference to his interpretation of the definition of *Pramāṇa* ——

by NISHIZAWA Fumihito

The subject of this essay is to elucidate the view on the definition of *pramāṇa*/ *tshad ma* of Sa skya paṇḍita kun dga' rgyal mtshan (1182-1251, Sa paṇ). Among scholars of the two main lines of *pramāṇa* tradition Sa paṇ was based on — one, that of gSang phu school, and the other, that transmitted by Śākyaśrībhadra — mTshur ston gzhon nu seng ge (ca. 1150-1210), the Sa paṇ's first teacher of *pramāṇa* of gSang phu line, played an essential role as well as Śākyaśrībhadra in the formation of Sa paṇ's *pramāṇa* thought. In the discussion of *pramāṇa* found in the chapter VIII. of RT p. 210ff., Sa paṇ started his statement by putting the definition of *pramāṇa*. The following conclusions have been drawn in this essay:

1. Sa paṇ put four *pūrvā-pakṣas*, of which the first three were copied from ShGr. These three were originally put as *pūrvā-pakṣas* in gTsang ṭik anonymously, and then identified by mTshur ston with the views of Devendrabuddhi, Prajñākaragupta and Dharmottara respectively. Sa paṇ criticized them by using rather his unique reasoning.

2. The third *pūrvā-pakṣas* attributed to Dharmottara in both ShGr and RT is in fact the view of rNgog lo tsā ba, but not that of Dharmottara. Both mTshur ston and Sa paṇ criticized it, but the points of their criticism are completely different. Though mTshur ston criticized rNgog's — and originally Dharmottara's — interpretation of *mi slu ba/ avisamvādana* as meaning "*don thob byed kyi'i nus pa* (**arthaprāṇaśakti*)", Sa paṇ basically accepted this interpretation.

3. The last *pūrvā-pakṣas*, which is not found in ShGr, is the view of mTshur ston. It is true that Sa paṇ was under influence of mTshur ston on the points of textual structure such as *sa bcad* and presentation of *pūrvā-pakṣas*. It does not

mean, however, that he was a loyal follower of his former teacher. On the contrary, it is the mTshur ston who is Sa paṅ's final target of criticism. This criticism is further directed to gTsang nag pa and Phya pa, the teachers of mTshur ston. Here we can find Sa paṅ's struggle for establishing his own doctrine departing from the great tradition of gSang phu Monastery.

4. Sa paṅ regarded *mi slu ba* (*avisamvādin*, PV II. 1a) and *ma shes don gsal* (*ajñātārthaprakāśa*, PV II. 5c) as having an identical meaning with regard to understanding *svalakṣaṇa* ("rang mtshan rtogs par don la mthun", cf. RT p.213. 1) and substantially defined *pramāṇa* as "*mi slu ba'i shes pa*". The originality of his interpretation is that he established this definition on the basis of the following two theories, that is, (1) theory of denying the existence of *bcad shes* (i.e., *bcad pa'i yul can*, *adhigataviśaya*) and (2) theory of one-to-one correspondence of definiens (*mtshan nyid*) and definiendum (*mtshon bya*).

サキヤパンディタの認識手段論

——認識手段の定義をめぐる——

西沢史仁

はじめに

チベットに於ける論理学 (pramāṇa, tshad ma^{*}) の伝承を検討する上で、サキヤパンディタ・クンガゲルツェン (Sa skya paṇḍita kun dga' rgyal mtshan, 1182-1251, 以下、サパン) はひととき重要な位置を占める。サパン以前には、論理学の研究に関しては、ゴク翻訳官 (rNgog lo tsā ba blo ldan shes rab, 1059-1109) やチャパ・チューキセンゲ (Phya pa chos kyi seng ge, 1109-1169, 以下、チャパ) 等の大学僧を輩出したサンブ僧院 (gSang phu dgon pa/ gSang phu ne'u thog) の学系が支配的であったが、シャーキャシュリーバドラ (Śākyaśrībhadra, 1127?-1225) 等のインドのパンディタから直接に教えを受けたサパンは、それに対して批判的な立場を取り、『量評釈』(PV) を中心に据

* 本稿に於いては、pramāṇa/ tshad ma には、基本的に、(1)「認識手段」と、(2)「論理学」という二つの訳語が与えられている。即ち、pramāṇa/ tshad ma は、論理学書に於いては、基本的に、正しい認識を獲得させる手段の意味として使用されるが、その場合には、「認識手段」の訳語を当てる。他方、そこから転じて、この語は、この認識手段を主題とする学科に対しても適用される。例えば、チベットに於いて、gzhung po ti lnga (五部典籍) の一つとしての tshad ma は、ダルマキールティの七部の論理学書 (tshad ma sde bdun) を中心とした論理学書一般、さらには、それらを扱う学科を意味する。その場合には、「論理学」という訳語を当てることにする。「量」という漢訳は、『量評釈』や『量決択』等の書名以外には原則的に使用しない。

えた新しい論理学の学系を打ち立てた。その意味でサパンはチベットの論理学史に於ける転回点となっている。そして、彼の学系は、サンブ僧院の学系と複雑に絡み合った形で、後代のゲルク派にも受け継がれていくことになる。本論考は、認識手段 (pramāṇa, tshad ma) の定義に関するサパンの解釈を主題として、彼が、先行するインド及びチベットの論師達の解釈を如何に受け止め、自身の解釈を打ち立てたのかを文献学的に解明することを目的とする。実際、認識手段の定義に関しては、ダルマキールティ (Dharmakīrti, ca. 600-660) 自身が明瞭な定義を与えていないこともあり、インドの註釈者達の間には解釈の相異を生む結果となった。チベットに於いてもその状況は同様である。サンブ僧院の学系は、資料的な制約もあり、これまで十分な研究が為されてこなかったが、断片資料を含む現在利用可能な資料だけからも、諸論師の間に種々の解釈の相異が見い出されることが分かる。本稿では、そのうち、ゴク翻訳官の『量決択難語釈』(rNgog dka' 'grel), ツァンナクパ・ツウンドゥーセンゲ (gTsang nag pa brtson 'grus seng ge, 12世紀, 以下, ツァンナクパ) の『量決択註善説集成』(gTsang 'tik), ツルトウン・シヨンヌセンゲ (mTshur ston gzhon nu seng ge, ca. 1150-1210 ⁽¹⁾, 以下, ツルトウン) の『論理学般若灯明』(ShGr) ⁽²⁾,

1 カイブの考証による。Kuijp 1989 p.22参照。他には、Hugon 2004 pp. vii-viii 参照。

2 この著作は Pascale Hugon による校訂本 (Hugon 2004) が最近出版された。その序文によれば、唯一の底本は、一葉九行で合計67葉からなるウメ (dbu med) 書体の手稿本である。その奥書からはその著者に関する情報は得られないが、Hugon 2004 pp. viii-xii の考証の通り、この著作の著者をツルトウンに帰することは妥当であろう。特に、ロオケンチェンのリクテル註には、ツルトウンに対する言及が見られるが、そこに、ツルトウンはツァンナクパの随順者であり、*Tshad ma shes rab sgron me* の著者であることが記されていることは、Hugon も指摘するように (Hugon 2004 p. ix), ShGr をツルトウンの作に帰する決定的な証拠である。Klo 'tik p. 161.6: slob dpon gtsang nag pa dang/ de'i rjes 'brang mtshur ston gzhon nu seng ge sogs/ ...; ibid. p. 161.17: de la 'dir smos pa'i phyogs snga ma'i tshig ji lta ba bzhin mtshur ston gzhon nu seng ge'i *tshad ma shes rab sgron me* na yod la/...

チャバの断片資料、さらにはサバンの『論理学正理宝蔵』(RT, リクテル)に対する諸註釈を利用し、サバンの認識手段論は、サンプの学系の中でも、取り分け、彼の論理学の最初の師であるツルトウンの ShGr に見い出される認識手段論と密接な関係にあること、サバンがリクテルに於いて自身の認識手段論を打ち立てるにあたり、科段の構成やその前主張の立て方に関してはツルトウンの ShGr を依用しつつも、それを批判的に検証し、最終的にはツルトウンの見解を否定することを通じて、自身の独自の解釈を立てたことを明らかにする。

1. サバンが前提とする論理学の伝統について

サバンの認識手段論、ひいては、サバンの論理学思想一般を分析するに際しては、サバンの思想的前提を踏まえる必要がある。サバンの論理学思想の独自性を抽出するには、彼が前提とするところの先学の論理学思想と彼の論理学思想を比較対照することを通じて、サバンが如何に先学の解釈を受け止め、そこから自身の解釈を打ち立てるに至ったかを文献に即して解明することが必須の作業であるからである。そこでまず最初に、論理学研究を中心としてサバンの経歴について簡単に纏めておこう⁽³⁾。サバンが論理学を初めて研究し始めたのは、19歳の頃(1201)からで、キャンドウル寺のツルトウン(rKyang 'dur ba mtshur gzhon nus seng ge)の下に於いてである。ツルトウンはツァンナクパの直弟子であり、共にサンプ系の学僧である。サバンは、1201-1203年にかけて、彼の下でダルマキールティの論理学とチャンドラキールティの中観を学んだと云われる。サバンが具体的に如何なる論理学のテキストを学んだのかについては幾つか説があり、ロパ・クンケン(lHo pa kun mkhyen rin chen dpal)——サバンの弟子にして伝記著者——によれば、ダルマキールティの『量

3 以下、サバンの論理学研究の経歴については、主にジャクソンの研究に依拠した。Jackson 1987 Vol. 1 第一章及び第五章、特に第五章参照。

決択』(Pvin)と、Jayānandaの *Tarkamudgara* (*rTog ge tho ba*)である。他方、同じくサパンの弟子にして伝記著者であるシャン・ゲルワベル (Zhang rgyal ba dpal)によれば、『量決択』を、*gZhal bya shes rab sgron ma'i phreng ba*⁽⁴⁾と共に、そして、Jayānandaのテキストを、提要 (stong thun)と共に学んだ。後代のシャーキャチョクデン (Shākya mchog ldan, 1428-1507)によれば、中観と論理学 (dbu tshad) 及び要義 (bsdus pa)である⁽⁵⁾。

サパンは、22歳の時 (1204)、シャーキャシュリーバドラ及び彼の随従達に出会うが、これがサパンの転機となった。23歳から26歳 (1205-1208)にかけて、シャーキャシュリーバドラの随従の一人であるスガタシュリー (Sugataśrī) からサンスクリット (文法・修辞学・詩学等)と論理学を学んだ。論理学は、ダルマキールティの『量評釈自註』、Mokṣākaraguptaの *Tarkabhāṣā*、さらにはニヤーヤ派の *Nyāyasūtra* を学んだようである。26歳から31歳 (1208-1213)にかけては、シャーキャシュリーバドラ及び彼の随従 (Saṃghaśrī/ Dānaśīla) から、サンスクリット・論理学・『現観莊嚴論』・『摂大乘論』・阿毘達磨・ヴァ

4 Kuijp 1989 p.22によれば、これは、おそらく Klo tik に *Tshad ma shes rab sgron me* として言及されるテキストと同一のものである。カイブは、既に Kuijp 1993において、ShGrの著者問題について論じているが、その点は、Hugon 2004 pp. viii-ixに簡潔に纏められている。この *gZhal bya shes rab sgron ma'i phrang ba* が ShGr に相当するのであれば、サパンは、ツルトウンの下で、『量決択』を ShGr と共に学んだことになる。これは極めて可能性の高いことであり、というのも、サパンのリクテルには ShGr からの逐語的な引き写しが多数見られ、サパンが ShGr を知っていたのはほぼ疑いのないことであるからである。Hugon 2004 p. xiiff. 参照。

5 要義 (bsdus pa) とは恐らくチャパ及びその随順者達による論理学綱要書を指そう。シャーキャチョクデンの『ゴク翻訳官伝』によれば、サパンは、Nyang stod に於いて、ツェクとツルトウンから中観・論理学 (dbu tshad) 及び要義 (bsdus pa) を聴聞したとあるが (rNog rnam thar 6a4, cf. Jackson p. 122, n. 55), ツルトウンから学んだ時期とツェクから学んだ時期は同時ではなく前後するようである。また各々から何を学んだのかは明記されていない。

スバンドウの諸著作・般若・律・密教を学んだ。論理学については、ディグナーガの『集量論』やダルマキールティの七部論書の他、『量評釈』の註釈としては、マノーラタナンディン註（第三章）、デーヴェーンドラブッディ註、プラジュニャーカラグプタ註（第二章と第四章？）、シャンカラナンダナ註（？）、『量決択』の註釈としては、ダルモータラ註、その他種々の著作を学んだらしい⁽⁶⁾。この頃（ca. 1210）にサパンは師と共に『量評釈』の再訳に取り掛かったようである。

その後（1213年以降）、サパンは、ツェク・ワンチュクセンゲ（brTsegs dbang phyug seng ge）について再度サンプ系の論理学を学んだ。ツェク・ワンチュクセンゲは、チャバの「八大獅子（seng chen brgyad）」と呼ばれる八人の高弟のうちの一人で、チャバの後を継いでサンプの座主を五年勤めた人物である⁽⁷⁾。彼からサパンが何を学んだかは詳細は不明であるが、ロパ・クンケンによれば、中観と論理学及びマイトレーヤの五法であり、シャーキャチョクデンによれば、それに加えて要義（bsdus pa）を学んだとされる。以上のような経緯を経て、彼の論理学思想は、37歳（1219）頃に著作されたリクテルに於いて結実することになる。

このようにサパンの研究歴を顧みる場合、彼の論理学研究は大きく三つ時期に分けられることが分かる。即ち、第一期は、1201-1203年に掛けてであり、ツァンナクパの直弟子であるツルトウンからサンプ系の論理学を——おそらくはShGrを通じて——学んだ時期である。これはサパンが初めて論理学を研究し

6 この期間に彼が学習した論理学のテキストは、ロパ・クンケンの伝記を下にジャクソンによってリストに纏められている。Jackson 1987 pp. 109-111参照。

7 rNgog rnam thar 5a2f. 参照。チャバには、-seng ge という語を名前の末尾に持つ八人の高弟がいたが、彼らを「八大獅子（seng chen brgyad）」と称する。ツェク・ワンチュクセンゲの他、ツァンナクパ・ツウンドゥーセンゲやツルトウン・シヨンヌセンゲもまた、「八大獅子」に数え入れられる。

た時期でもある。第二期は、1205-1213年に掛けてであり、シャーキャシュリーバドラ及びその随従達と出会い、彼らからサンスクリットを通じてディグナーガの『集量論』・ダルマキールティの七部論書及びその註釈者達の著作を学んだ期間である。第三期は、1213年以降、ツェク・ワンチュクセンゲから再度サンプ系の論理学を学んだ時期である。この三つの時期を経て、1219年頃にリクテルが著述された。

このようなサパンの論理学研究の来歴に於いて、まず注目すべき点は、サパンの最初の論理学の師がサンプ系のツルトウンであったことである。ツルトウンはチャバの高弟の一人にしてツァンナクパの随順者と呼ばれており、それ故、チャバ→ツァンナクパ→ツルトウン→サパンという系譜がまず考えられる。そして、その後、シャーキャシュリーバドラ等から八年掛けて原典に基づきダルマキールティの論理学を学んだ。この期間に、インド原典に対して比較的正確な解釈を身につけ、チベット独自の展開と変容を含むサンプ系の論理学に対して批判的な態度を強めたものと思われる。しかし、興味深いのは、その後に、再度ツェク・ワンチュクセンゲについてサンプ系の論理学を学び直していることである。このように、サパンは、サンプ系の論理学とシャーキャシュリーバドラ経由のインドの論理学を交互に研究しており、その両者の解釈に精通していたことが伺われる⁽⁸⁾。以上のように、サパンの論理学が、チャバ→ツァンナクパ→ツルトウン経由のサンプ系の論理学の流れと、シャーキャシュリーバドラ直伝の論理学の流れの二つを受け継いでいることは疑いのない事実である。それ故、サパンの論理学思想の独自性を抽出するには、彼が前提とするこの二つの学系を如何に受容し、あるいは、批判することを通じて、自身の論理学を打ち立てていったのかを解明することが必要であり、そのためには、リク

8 但し、このことは伝記資料からあくまで推察されるに過ぎず、その信憑性については実際に文献に即して検証される必要がある。本稿で扱われる認識手段の定義の議論に関する筆者の分析は後述されるであろう。

テルとサンプ系の論理学書及びインド原典との比較対照の作業が必須となる。

2. リクテルに引かれた認識手段の定義に関する四つの他説について

サバンの認識手段の定義に関する見解は、彼のリクテルの第八章「定義を考察する章 (mtshan nyid brtag pa'i rab tu byed pa)」に属する「個別的に認識手段の定義を確定すること (bye brag tu tshad ma'i mtshan nyid nges par bya ba)」(RT pp. 210.1-219.3) という科段に於いて纏まった形で見い出される。この科段は、「[認識手段の] 定義を確認すること (mtshan nyid ngos bzung ba)」(RT pp. 210.3-214.19) と「それにより増益が如何に断ぜられるのかという仕方 (des sgro 'dogs ji ltar gcod pa'i tshul)」(RT pp. 214.20-219.3) の二つに分けられるが、本稿では、そのうちの前者の科段のみを扱う。後者の科段では、認識手段により増益が断ぜられる仕方が主題であり、認識手段の定義に関する議論は前者の科段に集中しているからである。

「[認識手段の] 定義を確認すること」という科段は、他説の否定、自説の設定、議論の断滅という三つの科段に分けられる。そのうち議論の断滅を除いた前二者の科段が本稿で扱われる。まず最初に、他説の否定の科段では、偈に於いて他説が二つに大別され、自註に於いては、さらに四つに細別されている。まず、他説を示す偈は、以下の通り。RT p. 210.3:

「無欺と未知の対象を明示するものの二つは、(1) 異名 [と説かれるか],
あるいは、(2) 分けて説かれる。」

ここで、「無欺 (mi bslu ba)」と「未知の対象を明示するもの (mi shes don gsal)」とは、それぞれ、『量評釈』の以下の偈に示された認識手段の二つの規定を指している。

PV II. 1a: pramāṇam avisaṃvādi jñānam;/ Tib. tshad ma bslu med can shes pa// 「認識手段は、無欺の知である。」

PV II. 5c: ajñātārthaprakāśo vā;/ Tib. ma shes don gyi gsal byed kyang//

「未知の対象を明示するものもまた、〔認識手段である。〕」

ダルマキールティは、『量評釈』第二章の冒頭（PV II. 1-6）に於いて、認識手段の一般的設定を論じているが、認識手段の定義を考える場合に、インドに於いてもチベットに於いても、特にこの二脚の解釈がポイントとなる。前者の偈によっては認識手段の〈無欺性（*avisaṃvādatva*）〉が示され、後者の偈によっては、その〈未知の対象を明示するものであること（*ajñātārthaprakāśatva*, 以下、新得性）〉が示されている。サパンは、まずリクテル偈に於いて、他説を、この二つを異名（*rnam grangs, paryāya*）と見做す解釈と、別義として区別する解釈の二つに大別し、自註に於いて、さらに四つに細分している。その四つとは、順に、(1) デーヴェーンドラブッディ（*IHa dbang blo, Devendrabuddhi*）の説、(2) 莊嚴著者（*rGyan mdzad pa, alias Prajñākaragupta*）⁹⁾の説、(3) ダルモータラ（*Chos mchog, Dharmottara*）の説、(4) [大] バラモン（*Bram ze [chen po], alias Śaṅkaranandana*）の随順者達の説である。このうち、新得性と無欺性の両者を異名と見做す見解は、デーヴェーンドラブッディの説に、両者を区別して説く見解は、莊嚴著者の説に措定される。残りの二つは偈には直接的に説かれていない。

自註に挙げられるこの四つの説が果たして本当にサパンの説くように、デーヴェーンドラブッディらの説として原典に同定できるかどうかは慎重に検討されるべき課題である。筆者はこの四つの説のうち、最初の三つは、ツルトウンの *ShGr* に前主張として見い出されることを確認した。そして、サパンが前主張に四つの他説を立てるとき、前三者の他説はツルトウンの *ShGr* から引き写し、ツルトウン自身の説を第四の他説——即ち、大バラモンの随順者の説——

9) 莊嚴著者（*rGyan mdzad pa/ rGyan mkhan po*）とは、『量評釈 莊嚴（*Pramāṇavārttikālamkāra, Tshad ma rnam 'grel gyi rgyan*）』の著者の意味であり、プラジュニャーカラグプタ（*Prajñākaragupta*）を指す異名である。

として立てたことが ShGr とリクテルの記述を分析することから明らかとなった。さらに、ツルトゥンは、師のツァンナクパの『量決訳註』を踏襲しており、この三つの前主張も彼の『量決訳註』にまで辿ることが出来る。このことを示すために、以下のような作業の手順を取ろう。即ち、

- (1) まず最初に、サパンのリクテルから四つの他説を取り上げ訳出し、その内容を分析する。
- (2) 次に、その説がインド原典に見い出されるか検証する。
- (3) ShGr からサパンが借用したと推定される箇所を指摘し、さらには、それが依拠するツァンナクパの『量決訳註』の平行箇所を挙げる。
- (4) 第四の他説の起源を検討する。

そして最後にサパン自身の認識手段の定義の設定及びその独自性を取り上げることにする。ちなみに、この四つの他説は、後代、認識手段の定義を論ずる際に、多少の出入りを伴いつつも、サキャ派の文献のみならず、ゲルク派等の他派の文献に於いても繰り返し取り上げられることになり、認識手段の定義を論ずる際に、議論の一つの枠組みとなったものである。なお、リクテルの諸註釈に於ける発展的議論やゲルク派の認識手段論は別稿にて論ずる予定であるので、本稿では基本的に言及しない。

(1) デーヴェーンドラブッディに帰される説

サパンは、デーヴェーンドラブッディの説を以下のように立てている。RT p. 210.4-5:

「尊師デーヴェーンドラブッディは、「[無欺性と新得性の二つの] 何れによっても、[認識手段を] 表示することが出来る (gang yang rung bas mtshon nus)」と仰り、・・・」

デーヴェーンドラブッディに帰される説は、この短い一文のみによって規定さ

れており、その簡略さと曖昧さの故に、後代のリクテルの註釈者達の間に解釈の相異を生む原因となった。問題はサパン自身の解釈であるが、まずサパンは、前述したように、この説を、無欺性と新得性の二つを「異名」と見なす説として立てている。「異名」とは、通常、「同義異名 (don gcig ming gi rnam grangs)」と表現され、同一の言表対象 (brjod bya) を言表する異なる名辞を意味する⁽¹⁰⁾。それ故、サパンの解釈では、デーヴェンドラブッディの説は、無欺性と新得性を同義と見做す説である。その上、後続の文に於いて、この説が批判される箇所 (RT pp. 211.23-212.3) の記述を参照するならば、サパンは、デーヴェンドラブッディの説を、認識手段という一つの定義対象 (mtshon bya) に対して、無欺性と新得性という二つの定義 (mtshan nyid) を立てる説と見なしていたことが分かる。即ち、無欺性も新得性もそれぞれ認識手段の独立した一つの定義であり、それ故、その両者の何れによっても認識手段は表示される。それ故、纏めるならば、サパンの解釈によるデーヴェンドラブッディの説は、〈無欺性と新得性を同義異名と見做し、かつ、その両者を共に認識手段の独立した定義として立てる説〉として立てられる。

問題はこのデーヴェンドラブッディに帰される説に対するサパンの解釈の妥当性であるが、次にそれを原典に即して検証しよう。まず、リクテルに引用されたこの一文は、そのままの形では、デーヴェンドラブッディの『量評釈細註』(PVP) には見出せない。その代わりに、リクテルの諸註釈書には、その典拠として、以下の文章が挙げられている⁽¹¹⁾。PVP 5b5 ad PV II. 5c:

「それ故、そのように、[PV II. 1a に於いて、] 認識手段の定義として、無欺が一つ説かれた。「未知の対象を明示するものもまた」(PV II. 5c)、他

10 例えば、「兎を有するもの (ri bong can)」, 「涼光を有するもの (bsil zer can)」, 「白光を有するもの (’od dkar can)」は、皆、月 (zla ba) の異名である。なぜならば、それらは皆月という同一の言表対象を表示するものであるから。

11 g-Yag ṭik p. 553.6; Go ṭik chen 55.3.2; Go ṭik chung 315.4.5; Kḷo ṭik p. 168.21参照。

の第二の定義（*mtshan nyid gnyis pa*）である。」

ここには、確かに、認識手段の定義として無欺性が一つ説かれ、〈未知の対象を明示するもの〉、即ち、新得性は、それより他の第二の定義として説かれたことが明記されている。それ故、デーヴェンドラブッディは、無欺性と新得性の二つを共に認識手段の定義として認めていたことは確かである⁽¹²⁾。しかるに、これだけでは、この両者は、同義であるのか別義であるのか、それぞれが独立した一つの完全な定義であるのか、あるいは、両者を合わせて完全な一つの定義となるのか、等の点に関して解釈の余地を残しており、後代に解釈の相異を生む原因となった。その点に関してデーヴェンドラブッディは、こう述べている。PVP 6b4 ad PV II. 6bc:

「以上のように説かれた二種の定義（＝無欺性と新得性）が依拠する自性を有するもの（*mtshan nyid rnam pa gnyis brten pa'i ngo bo can*）が、認識手段である。」

さらには、PVP 6b5 ad PV II. 7a:

「意図された通りに成就されるべき目的に対して無欺であるので、そして、

12 この点に関して、シャーキャブッディは当該部の註釈に於いて、こう述べている。*Pramāṇavārttikaṭīkā* D 79a6: *gzhan mtshan nyid gnyis pa zhes bya ba ni 'jig rten gyi rjod par byed pas 'di ni gcig yin la/ 'di ni gzhan rnam pa gnyis pa yin no zhes bya ba smos pa yin no//... de skad 'di ni spyi'i mtshan nyid gnyis pa yin no zhes bstan par 'gyur ro//*. 「『未知の対象を明示するもの』もまた『認識手段である』」（PV II. 5c）等ということに対して、「他の第二の定義」（PVP 5b6）というのは、世間の言語表現により、「これは一方のものである。他方、これは他の第二の種類のものである」と云うことである。…このように、これ（＝未知の対象を明示するもの）は、[認識手段の] 第二の一般的定義（* *sāmānyalakṣaṇa*）であると示されたことになる。」ここでシャーキャブッディが、新得性を、認識手段の「第二の一般的定義（*spyi'i mtshan nyid gnyis pa*）」と表現している点に留意すべきである。この表現からは、新得性は単に定義の一支分であるのではなく、無欺性とならび、第二の独立した一般的定義と見なされていたことが分かる。

未知の対象を明示するものであるので、認識手段である。」

ここでまず注目したいのが、無欺性と新得性の二つが認識手段の「二種の定義 (mtshan nyid rnam pa gnyis)」と表現されている点である。この二つの記述には、無欺性と新得性が、それぞれ認識手段の異なる二つの側面を規定するために立てられた二種の定義であることが示されている。即ち、認識手段が目的達成に対して欺き無きものである点から無欺性が、そして、未知なる対象を明らかにするものである点から新得性が定義として立てられたのであり⁽¹³⁾、少なくともデーヴェーンドラブッディの解釈を見る限り、両者が合わさることにより初めて一つの独立した定義が立てられるわけではない。デーヴェーンドラブッディ自身は、無欺性と新得性の二つを認識手段の異なる二つの側面を示す独立した二種の定義と解していたと見做すのが自然であろう。

他方、ツルトウンの論理學書には、デーヴェーンドラブッディの説は以下のように立てられている。ShGr p. 68.15-17:

「また、尊師デーヴェーンドラブッディは、「認識手段の言説は、無欺によっても表示可能であるが、未理解の対象の明示者によっても表示可能であるので、[認識手段の定義は] この二つの何れでもよいのである (‘di gnyis gang yang rung pa yin no)⁽¹⁴⁾」と仰っている。」

13 例えば、釈尊は、至福 (nges par legs pa, niḥśreyasa) 等を求める衆生の目的を達成することに対して欺きがないので、無欺であり、かつ、それら未知なる至福等を衆生に明らかにするものであるので、未知な対象を明示するものである。その意味で、「認識手段 (pramāṇa)」と類似しており、それ故、「認識手段」と云われる。PVP 6b5ff. ad PV II. 7a を見よ。Krasser 2001 pp. 182-184, 191, n. 72 参照。

14 gang yang rung ba/ gang rung とは、何れか一方のみを意味する場合もあるが、ここでは、無欺性と新得性の何れか一方のみが定義であることを述べているのではなく、無欺性と新得性の何れも認識手段の定義としてよい、という意味である。直後に引かれるツェンナクパ註に見られる gang yang rung ba'i gnyi ka という表現も同様に解釈すべきである。

デーヴェンドラブッディのPVPには、単に、無欺性が認識手段の第一の定義であり、新得性が第二の定義であるとしか述べられていなかったが、ここでは、認識手段は、無欺性と新得性の何れによっても表示されることが明記されており、サパンの記述は、デーヴェンドラブッディの原典を直接的に参照したのではなく、ツルトウンのこの記述を簡略した形で引いたものであることが推察される。ちなみに、この説は、ツァンナクバの『量決訳註』では、「正理の主の御足に頂礼する者達（rigs pa'i dbang phyug nyid kyi zhabs kyi rdul la reg pa dag）」の見解として見い出され、ツルトウンがデーヴェンドラブッディの説に同定したものである。当該箇所を引いておこう。gTsang ṭik 16a5:

rigs pa'i dbang phyug nyid kyi zhabs kyi rdul la reg pa dag slob dpon gyi dgongs pa mi slu ba'i yul can dang ma rtogs pa'i don gsal ba gang yang rung pa'i gnyi ka yin par 'chad do// 「正理の主（＝ダルマキールティ）の御足に頂礼する者達は、[認識手段の定義に関する、] 尊師（＝ダルマキールティ）の密意は、〈無欺の対象を有するもの〉と、〈未理解の対象を明示するもの〉の何れでもよい両者であると説く。」

(2) 莊嚴著者に帰される説

莊嚴著者、即ち、プラジュニャーカラグプタに帰された見解は以下の通り。

RT p. 210.5-14:

「莊嚴著者は、「勝義の認識手段と世俗の認識手段の二つのうち、前者は、無二の直観の知、即ち、聖者達の各々自身により認識する智慧の対象となっているもの（＝無二性）を明瞭に直観するもの（＝自己認識）（myong ba gnyis med kyi shes pa 'phags pa rnam kyis(→kyi)so sor rang gis rig pa'i ye shes kyi yul du gyur pas(→pa)gsal bar myong ba⁽¹⁵⁾）であり、[それは、] 勝義でもあり認識手段でもあるので、勝義の認識手段である。その定義は

〈未知の対象を明示するもの〉であり、〈無欺〉ではない。断定された対象 (bcad pa'i don, i.e., gnyis med) を獲得することはないからである。言説の認識手段は、凡夫の相続にあるものであり、所取能取の二として顕現する限り、言説として妥当であるので、その定義は、〈無欺性と未知の対象の明示者の集合体〉である。断定された対象を獲得することがあるからである」と仰っており、・・・」

莊嚴著者に帰される説は、認識手段を二諦説の立場から勝義と世俗の二に分けて、それぞれに別個の定義を立てるものである。そのうち、勝義の認識手段とは、所取と能取の無二性を直観する知であり、それは聖者の自己認識に他ならない。その勝義の認識手段の定義として、〈未知の対象を明示するもの〉(＝新得性) が立てられる。他方、世俗の認識手段は、所取能取の二が顕現する凡夫の知であり、その定義として〈無欺性と新得性の集合体〉が立てられている。即ち、

(1) 勝義の認識手段の定義 = 新得性

(2) 世俗の認識手段の定義 = 無欺性と新得性の集合体

このように、サパンによれば、プラジュニャーカラグプタの説は、〈認識手段の一般的定義を立てずに、二諦説の立場から認識手段を勝義の認識手段と世俗の認識手段の二に分けて説き、前者の定義としては新得性を、後者の定義としては無欺性と新得性の集合体を立てる説〉と解釈される。この見解は、字句通りの形では『量評釈莊嚴』には見出せないが、その基となった典拠は以下の記述であろう⁽¹⁶⁾。即ち、PVBh p. 30.2-6(Ono 2000 p. 78.8-13)ad PV II. 5c:

「『未知の対象を明示するものもまた、[認識手段である]』(PV II. 5c)。即ち、

15 テキスト訂正は、g-Yag ṭik p. 553.11-13及び ShGr の平行箇所 (ShGr p. 69.2-4) に基づく。

16 g-Yag ṭik p. 553.18ff.; Go ṭik chen 55.3.4ff. 参照。以下の PVBh のテキストの読みは、基本的に Ono 2000 に依拠する。

あるいは、これも認識手段の定義である (atha vedam pramāṇalakṣaṇam)。それによって明示されるので、「明示するもの」である。未知の対象の明示者である知が認識手段である。他方、世俗の知は、未知の対象を明示するものではない。なぜならば、それによって、未知の対象は何も明示されないから。把握された色等のみが、それにより個別的に分別されるから。他方、理解を省察しないことから、「それは単一である」と言説される。」

PVBh p. 30.19-22(Ono 2000 p. 79.15-19)ad PV II. 5c:

「あるいは、artha の語によって、ここに、勝義 (paramārtha) が説かれている。「未知の対象を明示するもの (ajñātārthaprakāśa)」とは、勝義を明示するもの (paramārthaprakāśa) という意味である。そして、勝義とは無二相性 (advaitarūpatā) である。それを明示するもののみが認識手段である。そして、それと同様に、「[智の] 自体は、[智] それ自身から、理解される」(PV II. 4d) と説かれた。そして、「[智の] 認識手段性は、言説によって [理解される]」(PV II. 5a) と説かれた。そのうち、これ (= PV II. 5c に示される未知の対象の明示者) は、勝義に属するものの認識手段の定義であり、他方、前者 (= PV II. 1a に示される無欺の知) は、言説に属するものの [認識手段の定義である (tatra pāramārthikapramāṇalakṣaṇam etat, pūrvaṁ tu sāmvyavahārikasya)]。」

ブラジュニャーカラグブタによれば、PV II. 5c は、勝義の認識手段の定義を示し、他方、PV II. 1a は、世俗の認識手段を示す。勝義の認識手段とは、勝義、即ち、無二性を理解する認識手段を意味し、認識手段それ自身が勝義であるわけではない。勝義 (= 無二性) を対象として理解する認識手段である故に、勝義の認識手段と云われる。他方、言説の認識手段とは、無二性以外の言説に属する対象、例えば、壺等の世俗の対象を理解する認識手段を意味する。このように、二諦に基づき認識手段が区別されるといっても、認識手段の側からその区別が立てられるのではなく、その認識手段によって理解されるべき対象の側

から勝義と世俗の区別が立てられる点に留意すべきである⁽¹⁷⁾。

一つ付言するならば、ここでプラジュニャーカラグプタは、「未知の対象」という語に対して特殊な解釈を与えている。一般に、この限定は、壺を把握する第二刹那の眼知等の再理解 (bcad shes) を断除する⁽¹⁸⁾ ために付加されると解される。壺等の対象を最初に把握する知のみが認識手段であり、その直後に生じたその同じ対象を繰り返し把握する知は、新たな認識結果を齎さないで、認識手段とは見なされない。壺は、壺を把握する第一刹那の眼知にとって、未

17 プラジュニャーカラグプタが、知の側ではなく、対象の側に於いて二諦の差異を立てていることは、ここに引いた文章中に見られる「勝義を明示するもの (paramārthaprakāśa)」という表現や、「言説に属するものの〔認識手段〕 (sāṃvyavahārikasya [pramāṇam])」という表現から明らかである。pāramārthikapramāṇam とは、プラジュニャーカラグプタの認識手段論では、pāramārthikasya pramāṇam と属格の格限定複合語で解釈されるのであり、同格限定複合語で解されるのではない。その意味で、pāramārthikapramāṇam は、ここでは、「勝義に属する認識手段」と訳されるべきではなく、「勝義に属するものの認識手段」と訳されるべきである。これは、勝義に属するもの (pāramārthika), 即ち、無二性を理解する認識手段の意味である。

18 筆者は、本稿に於いて、「断除」という用語を、vyavaccheda/ rnam par bcad pa の訳語として使用している。これは、pariccheda/ yongs su gcod pa と対になる概念であるが、後者には、「断定」という訳語を当てる。これは原語及びその蔵訳に見られる, cheda/ bcad, gcod という語に基本的に「断つ」という意味があることを勘案した訳である。「確定」という語は、基本的に、niścaya/ nges pa の訳語として使用し、「断定」と区別する。断除と断定とは、通常、例えば、語という基体に於いて、常住を断除することにより、その対立項である無常が断定される、というように、或る一つの基体に於いて、二つの対立項の一方が断除されることは、即、他方が断定されること、及び、一方が断定されることは、即、他方が断除されることを意味する。他にも、蔵外文献に於いては、定義中の諸限定が付加される必要性を示す用語としても使用される。例えば、ここに示したように、認識手段の定義中に新得性の限定を付加する断除の必要性 (rnam bcad kyi dgos pa) は、再理解を断除するため、即ち、再理解が認識手段であることを排除するためである。

知の対象であるが、壺を把握する第二刹那の眼知にとっては未知の対象ではない。このように、「未知」であるか否かは、新たな認識結果を齎すか否かに応じて規定されるのであり、同じ壺でも最初に認識されるならば、未知の対象であり、それに引き続く知によって再度認識されるならば、未知の対象ではない。他方、プラジュニャーカラグプタの解釈では、「未知の対象」とは、凡夫にとって未知である対象を意味する。勝義（＝無二性）は、凡夫により未だかつて知られたことのない対象であるので、「未知の対象」である。なぜならば、それを理解するのは聖者のみであるから。壺等の世俗の対象は、最初に認識されようが再度認識されようが、それは未知の対象ではない。なぜならば、凡夫にとって未知の対象ではないから。このように、「未知」という概念を、凡夫と聖者の区別に基づいて立てるのがプラジュニャーカラグプタの特徴である。

以上が原典に基づくプラジュニャーカラグプタの認識手段論の特徴であるが、サパンによるプラジュニャーカラグプタの見解の解釈には問題がある。即ち、第一に、サパンは、二諦の区別を対象の側ではなく、認識手段の側に立っている。このことは、彼が、勝義の認識手段を「勝義でもあり認識手段でもあるので、勝義の認識手段である」（RT p. 210.8）といって、同格限定複合語として解釈していることから明らかである。第二に、サパンは、世俗の認識手段の定義として、無欺性と新得性の集合体を立てているが、原典に基づく限り、無欺性のみが立てられるべきである⁽¹⁹⁾。このようにプラジュニャーカラグプタの認識手段論に関するサパンの解釈には問題があるが、実はこのサパンの記述は、プラジュニャーカラグプタの原典を直接参照して立てられたものではなく、単に、ShGr からの引き写しに過ぎない。即ち、この RT p. 210.5-14 の記述は、多少の異読を伴うが、ShGr p. 69.1-7 とほぼ一致する。さらに、この記述は、ツァンナクパの以下の文章に基づく。gTsang tik 16b4-6:

yang don che long du rnam par gzbag pa dag don dam pa dang tha snyad 'jal
ba'i tshad ma gnyis las/ dang po ni ma rtogs pa'i don gsal ba tsam yin gyi mi

slu ba ma yin ste de kho nar shes pa rang gsal gyi ngo bo la 'jug yul dang
thob pa myed pa'i phyir ro// gnyis pa ni sngar ma rtogs pa'i don la mi slu ba
ste/ mi slu ba tsam bcad pa'i yul can la'ang yod pas so zhes zer ro//「また、
意味を粗略に設定する者達は、「勝義と言説を認識する二つの認識手段の
うち、前者は、未理解な対象を明示するものだけであり、無欺ではない。
なぜならば、自身を明示することを自性とする実性の知には、行動対象と
[その行動対象を] 獲得することはないからである。第二のもの（＝言説
を認識する認識手段）は、以前に理解されていない対象に対して無欺なも
のである。なぜならば、無欺のみは、〈理解された対象を有するもの（bcad
pa'i yul can, i.e., bcad shes）〉にもあるからである」と云う。」

ここに見られる「意味を粗略に設定する者達」をツルトゥンは、莊嚴著者に同
定し、サバンもそれを踏襲したのである。ツァンナクパによれば、言説の認識
手段の定義に、無欺性のみを立てるならば、無欺性を有する再理解に逸脱が生
ずるので、それを断除するために新得性の限定が必要とされる。それを踏まえて、
ツルトゥンは、世俗の認識手段の定義に、無欺性と新得性の集合体を立て、
それはそのまま無批判的にサバンに引き継がれたのである。サバンがもし原典
を直接に参照していたならば、このような誤りは避けられたであろう。

19 この点は、一部のリクテルの註釈者にも意識されている。例えば、ヤクトゥンサン
ゲールは、無欺性のみを世俗の認識手段の定義として立てている。g-Yag tik p.
553.15f.: tha snyad pa'i tshad ma ni so so skye bo'i rgyud la yod pa/ gzung 'dzin gnyis
su snang ba'i mngon sum(→ rjes)gnyis yin la/ de ni mi slu ba yin te/ bcad pa'i don
thob pa yod pa'i phyir/ zhes smra ste/ des mdzad pa'i 'grel ba las/ ... 「言説の認識手
段は、凡夫の相続にあり、所取能取が二として顕現する直接知覚と推論の二つであ
るが、それは無欺である。断定された対象を獲得することがあるからである、と〔ブ
ラジュニャーカラグブタは〕云い、彼により著作された註釈（＝『量評釈莊嚴』）
に於いて、…」

(3) ダルモータラに帰される説

ダルモータラに帰される説は以下の通り。RT pp. 210.14-211.4:

「また、尊師ダルモータラは、『量決訳』に於いて、「これら（＝直接知覚と推論）によって、対象を断定して行動を起こすとき、目的達成に対して欺きがないからである」(PVin I. p. 30.17-18⁽²⁰⁾)と云う三つの語句によって表示されている三つの特性を有するものとは、即ち、(1) 自体の特性 (rang gi ngo bo'i khyad par) は、対象を獲得させる能力 (don thob byed kyi nus pa, *arthaprāpaṇasakti) であり、[認識手段の] 定義基体である直接知覚と推論にある、壺や火等の認識対象を獲得させる能力である。(2) 対象の特性 (yul gyi khyad par) は、把握された、ないし、把握されていない対象を何であれ獲得させるのではなく、断定された行動対象を獲得させるもの (yongs su bcad pa'i 'jug yul thob pa) である。(3) 作用の特性 (byed pa'i khyad par) は、対象を断定することにある能力 (don yongs su gcod byed la yod pa'i nus pa) であり、即ち、知によって火や水等の対象を断定してから行動を起こすことにより [それらの対象を] 獲得させる能力であり、手足等によって獲得させる能力ではないのである。

そのうち、自体の特性によって、〈事物を把握するもの (dngos por 'dzin pa, *vastugrāhaka)〉が認識手段の定義であることが断ぜられるが、対象の特性によって、存立不可能 (mi srid pa, asaṃbhava) [の過失] が断ぜられ、作用の特性によって、過遍充 (khyab ches, ativyāpti) [の過失] が断ぜられる。他方、不遍充 (ma khyab pa, avyāpti) [の過失] が断ぜられることは、[本文に明示されていないが、意味的に] 補足されるのであ

20 Skt. frag.: na hy ābhyāṃ arthaṃ paricchidya pravartamāno 'rthakriyāyāṃ viśaṃvādyate. Cf. PVin I. p. 32, n. 1.

る (kha bskang ngo)。〈真実の対象を理解するもの (bden pa'i don rtogs pa)〉は、認識手段の作用 (byed pa) であり、定義ではないのである」と仰っている。」

ダルモータラに帰される説としては、『量決択』の一文——これは『量決択』に於いて認識手段の定義を示すとされるものである——を典拠に、認識手段に三つの特性、即ち、自体の特性・対象の特性・作用の特性の三つを立て、その三つの特性によって規定された知を、認識手段の定義と為すものである。問題はこの見解が果たして実際にダルモータラの註釈の中に見い出されるのかということである。結論から言うならば、彼の『量決択註』には、確かに、ここに示された認識手段の三つの特性に内容的に相当する記述は見い出されるが⁽²¹⁾、ここに引用された『量決択』の一文に、「三つの特性」を読み込み、それらによって限定された知を認識手段の定義として立てる記述は見出せない。さらには、「〈真実の対象を理解するもの〉は、認識手段の作用であり、定義ではない」ということを示す文章も見出せない。このことを裏付けるように、リクテルの註釈者達も、この見解の典拠に関しては沈黙を保っている⁽²²⁾。筆者は、この解釈は、ダルモータラの『量決択註』ではなく、ゴク翻訳官の『量決択難語釈』に見い出されることを確認した。それ故、ここにダルモータラの解

21 認識手段の三特性に内容的に相当するものは、PVinT のうちに確かに確認される。自体の特性については、例えば、PVinT p. 40.15: ... 'on kyang thob par nus pa nyid do// ... 'jug par byed pa ma yin pa gang yin pa de la yang don thob par rung ba yod pas na de la'ang tshad ma kho na'o//. 対象の特性については、例えば、PVinT p. 30.10: tshad ma'i yul ni rnam pa gnyis te/ gzung ba ste so sor snang ba'i don dam pa'am/sgro btags pa dang zhen pa'i yul lo// de dag las shes pas gang la 'jug pa'i yul de la thob pas mi slu ba yin gyi gzung ba la ni ma yin no//; PVinT p. 36.4: yongs su bcad pa'i don 'jug pa'i yul thob par byed pa ni tshad ma yin no zhes smras pa na/...; PVinT p. 40.6: de ltar na yongs su bcad pa'i 'jug pa'i yul thob par byed pas yang dag pa'i shes pa nyid du 'di gnyi ga bye brag med do//. 第三の作用の特性については、直前に挙げた自体と対象の特性を示す記述から読み取れる。

釈として提示された見解は、正確には、ダルモータラ自身の見解ではなく、ゴク翻訳官の見解に相当するものと言えよう。その点を検討する前に、ShGr と gTsang tik の対応箇所を挙げておこう。まず、RT pp. 210.14-211.4は、ShGr pp. 65.14-66.6からの引き写しである⁽²³⁾。そして、このShGrの記述の基となったツァンナクバの『量決訳註』の記述は以下の通り。gTsang tik 16a7-16b1:

yang gzhung gi don la legs par [mi] sems pa dag mi slu ba'i don yongs su
gcod byed kyis bstan pa'i don thob par byed pa ste/ de yang don yongs su
bcad nas 'jug pa na slu ba myed ces pa'i tshig gsum gyis mtshon pa'i ngo bo
don mthob (→thob) pa'i nus pa dang yul gang yongs su bcad pa dang byed
pa yongs su gcod byed kyi khyad par dang ldan pa'i nus pa nyid tshad ma'i
mtshan nyid yin la/ don rtogs pa ni byed pa yin gyi mtshan nyid ni ma yin te
rtogs pa'i cha nas nye bar mkho' ba myed pa'i phyir ro zhes zer ro//「また、
典籍の意味を正しく考えていない者達⁽²⁴⁾は、「無欺の意味は、断定によっ

22 例えば、ヤクトゥンサンゲーペルやコランパは、デーヴェンドラブッディと莊嚴著者の見解の典拠を、それぞれ原典から引用して示しているが、ダルモータラの見解の典拠は示していない。g-Yag tik p. 554.4-14; Go tik chen 55.4.4-56.1.2参照。

23 この点、及び、gTsang tik と rNgog dka' 'grel の関連箇所は、部分的に、Hugon 2004 p. 66, n. 102に指摘されている。但し、Hugonはこの見解をPVinTからの直接的引用ではなく、ダルモータラの見解の“summary”(要約)と解釈しているが、それは妥当ではない。これは後述するようにダルモータラの『量決訳註』に依拠したゴク翻訳官の解釈である。そこにはダルモータラの『量決訳註』に見られないゴク翻訳官独自の解釈が含まれているので、それをダルモータラの見解の要約と見なすことは出来ない。

24 原文は、gzhung gi don la legs par sems pa dag (典籍の意味を正しく考えている者達)である。ここで、「典籍(gzhung)」とは、具体的には、直後に引かれる『量決訳』の一文を指すが、以下の内容から判断して、この論者は、この一文の内容を正しく理解していない者とすべきであるので、[mi] sems pa dag と否定辞を補足して解釈しておく。

て示された対象を獲得させることである。それはまた、「[これら（＝直接知覚と推論）により、人が] 対象を断定して行動を起こすとき、[これらは、目的達成に対して] 欺きがない」（PVin I. p. 30.17）という三つの語句によって表示された（1）自体 [の特性]、即ち、対象を獲得させる能力と、（2）対象 [の特性]、即ち、何であれ断定されたもの、（3）作用 [の特性]、即ち、断定するものという [三つの] 特性を有する能力こそが、認識手段の定義である。他方、〈対象を理解するもの〉は、[認識手段の] 作用であり、定義ではない。なぜならば、[認識手段は] 理解の点から必須であることではないから」と云う。」

この「典籍の意味を正しく考えていない者達」の説を、ツルトゥンは、ダルモッタラの説に同定し、サバンもそれを踏襲したのであるが、その同定には問題を含む。前述したように、この説は厳密にはダルモッタラの原典に見い出されるものではなく、ゴク翻訳官の『量決択』に対する註釈に見い出されるものである。即ち、ゴク翻訳官は、ここに引かれた『量決択』一文に対する註釈に於いて、彼の認識手段論を展開しているが、そこに、認識手段を三つの特性から規定するこの見解が見い出されるのである。rNgog dka' 'grel p. 28.7-13:

「それもまた、（1）「これら（＝直接知覚と推論）によって対象を断定して」という [語句] と、（2）「行動を起こすとき」という [語句] と、（3）「目的達成に対して欺きがないからである」という三つの語句に分けられる。即ち、最後 [の語句] によって、[自説として] 認められる定義が把握され、中間 [の語句] によって、存立不可能 [の過失] が断滅され、最初 [の語句] によって、過遍充 [の過失] が断滅される。[他方、] 不偏充 [の過失] が断滅されることは、[『量決択』の語句により直接的に示されていないが、] 意味的に（don gyis）理解されるからであり、[これらにより、] 定義の三つの過失が断滅される。そして、[定義を] 確定する知を考察することもまた、意味的に知られるべきであり、以上のように、三つの総議⁽²⁵⁾（spyi

don gsum) とこの『量決択』の] 語句が結びつけられるのである。」

ここでゴク翻訳官は、問題の『量決択』の一文を三つの部分に分けて、それらを定義の提示及び定義の過失の断滅と結び付けて解釈している。これはダルモットラの『量決択註』に見られないゴク翻訳官独自の解釈である⁽²⁶⁾。そして、この三つを自体・対象・作用の三つの特性に結び付けることも彼独自の解釈であるが、それは後続の文章に見い出される。即ち、rNgog dka' 'grel pp. 29.12-30.1:

「そこに於いて、「目的達成に対して欺きがないから」(PVin I. p. 30.17) と云うことにより、〈事物を把握するもの〉⁽²⁷⁾ が「認識手段の定義として」断滅され、〈欺かないもの (mi slu bar byed pa)〉を「認識手段の定義として」承認することにより、「自説として」認められる定義を把握するのである。このように、〈欺かないもの〉は、(1) 「対象を」獲得させる能力、(2) 断定された対象の究極的なもの、(3) 知らしめる作用と結び付けられたものであり、自体の特性は「他の」二つ「の特性」(＝対象の特性と作用の特性)によって把持される。それ(＝三つの特性)によっても、(1) 〈事物を理解するもの〉だけが認識手段であることと、(2) 〈断定されてい

25 最後の文章に見られる「三つの総義」とは、ゴク翻訳官が認識手段一般の定義 ([tshad ma]spyi'i mtshan nyid) の科段を三つに分けたその三つを指す。即ち、'dod pa'i mtshan nyid ngos bzung ba; mtshan nyid kyi skyon spang ba; mtshan nyid nges par byed pa'i shes pa dpyad pa の三つである。rNgog dka' 'grel p. 28.4ff. 参照。三特性もこの『量決択』の語句に結び付けられるが、ここで三つの総義は三特性に結び付けるべきではない。

26 タルマリンチェンは、彼の『量決択大註』の当該箇所の註釈に於いて、このゴク翻訳官の解釈に言及している。bsTan bcos Tshad ma rnam nges kyi tik chen dgongs pa rab gsal(1st ed. Kan su'u mi rigs dpe skrun khang, 1993. 2 vols.)Vol. 1, p. 23.11-13参照。

27 「事物を把握するもの (dngos po 'dzin pa)」とは、シャーキャチョクデンによれば、ローカーヤタ派 (Lokāyata, rGyang 'phen pa) による認識手段の定義である。Shak tik chen 296.2参照。

ない対象を獲得させる能力〉が認識手段であることと、(3)〈認識する作用がないものにある能力〉が認識手段であること等が順次に排除される。それ故、「欺かないもの」という語のみによって、三つの対象より別異のものが引発されたが、それをより明瞭にするために、対象〔の特性〕と作用〔の特性〕が示されたのである。」

ゴク翻訳官自身の表現を用いるならば、三特性は以下の通りである。

- (1) 自体の特性：獲得させる能力 (thob par byed pa'i nus pa)
- (2) 対象の特性：断定された対象の究極的なもの (yongs su bcad pa'i don gyi mthar thug pa)
- (3) 作用の特性：知らしめる作用 (shes par byed pa'i byed pa)

この三つは、順に、『量決択』の一文の三つの語句、即ち、"don bya ba la mi slu ba" と、"jug pa na" と、"don yongs su bcad nas" という語句によって示されていると解釈される。纏めるならば、以下のようになろう。

『量決択』の語句	特性	ゴク翻訳官による規定	定義の過失の断滅
"don bya ba la mi slu ba"	ngo bo'i khyad par	thob par byed pa'i nus pa	(自説の定義を示す)
"jug pa na"	yul gyi khyad par	yongs su bcad pa'i don gyi mthar thug pa	mi srid pa spang ba
"don yongs su bcad nas"	byed pa'i khyad par	shes par byed pa'i byed pa	khyab ches pa spang ba

参考までに、これを、gTsang tik と ShGr と RT に見い出される三特性と対照しておこう。

	gTsang tik	ShGr	RT
自体の特性	don thob pa'i nus pa	don thob byed kyī nus pa	don thob byed kyī nus pa
対象の特性	gang yongs su bcad pa	yongs su bcad pa'i 'jug yul thob pa	yongs su bcad pa'i 'jug yul thob pa
作用の特性	yongs su gcod byed	don yongs su gcod byed la gnas pa'i nus pa	don yongs su gcod byed la gnas pa'i nus pa

以上のように、このダルモータラに帰された説は正確にはゴク翻訳官の説であることが明らかになったが、それではツルトウンがこれをダルモータラの説に帰したのは全くの誤りなのであろうか。実はこの説は厳密にはゴク翻訳官の説に帰されるべきであるが、ゴク翻訳官自身、『量決択難語釈』に於いて、認識手段の定義の設定はダルモータラの説に随順することを明言しており⁽²⁸⁾、ゴク翻訳官独自の解釈を含むとはいえ、基本的にはダルモータラの解釈に相応するものなので、その意味ではツルトウンの同定は完全なる誤りというわけではない。それ故、この第三の他説は、「ダルモータラの『量決択註』に依拠したゴク翻訳官の説」と表現すべきである。

(4) 大バラモン随順者達に帰される説

大バラモンの随順者達に帰される説は以下の通り。RT p. 211.4-22:

「[大] バラモンに随順する者達 (bram ze'i rjes su 'brang ba rnam) は、[「認識手段の定義は、] 〈三法を有する⁽²⁹⁾、真実の対象を理解するもの (bden pa'i don rtogs chos gsum ldan)〉であり、[「以前に理解されていない対象に対して、把握方法が不逸脱であることにより増益を排除するもの (sngar ma rtogs pa'i don la 'dzin stangs mi 'khrul bas sgro 'dogs sel ba)』と云われる。それもまた、三特性を有するものであり、即ち、(1) 自体の特性 (ngo bo'i khyad par) は、対立項の増益を排除するだけのもの (bzlog phyogs

28 rNgog dka' 'grel p. 44.18: 'dir ni slob dpon chos mchog gi lugs la ltos te tshad ma'i mtshan nyid brjod pa yin no//「ここでは、尊師ダルモータラの説に依拠して、認識手段の定義を述べた。」

29 ここで「三法 (chos gsum)」とは、以下に列挙される三つの特性 (khad par gsum) を指す。「法 (chos)」は、dharma の訳語であり、文脈に応じて種々の意味を有するが、ここでは属性の意味である。

kyi sgro 'dogs sel ba tsam) であり、認識手段は否定と定立を為すものではない。即ち、「[知により対象が理解されるとき、] 対象に対しては、知の作用 (byed pa) があるが、それ (= 対象) には [真実としては] 些かも [知により] 作られたもの (byas pa) はない」⁽³⁰⁾ と説かれているようなものである。(2) 対象の特性 (yul gyi khyad par) は、以前に理解されていない対象 (sngar ma rtogs pa'i don) であるが、それもまた、[以前に] 理解されていない対象の実体 (rdzas) を意味するならば、再理解に対して過遍充になり、以前に理解されていない類 (rigs) を意味するならば、認識手段はあり得ないので、場所と時と形相が別々に確定されている、以前に理解されていない類を理解すること [を意味するの] である。(3) 把握方法の特性 ('dzin stangs kyi khyad par) は、対象に対して不逸脱であること (don la mi 'khrul ba) である。それもまた、智が対象に一致するものとして [対象を] 把握するだけではない。なぜならば、憶測 (yid dpyod) にも [それは] あるからである。そうではなく、[対象に対して不逸脱であるものとは、] それ (= 対象) を把握する [知] の普遍類 (de 'dzin gyi spyi rigs) が、対象がないならば生じ得ないもの [を意味する。例えば、] 煙が火に対して不逸脱であるが如きである。それもまた、対象の形相のみにに対して不逸脱であるものは、誤知 (log shes) にもあるが、自相に対して不逸脱であるものを云うならば、増益されたものを認識する認識手段 (= 推論) に対して不遍充であるので、自身の増益されていない対象 (= 自相) に対して不逸脱であるもの [を意味するの] である。

それ (= 理解) には、作用 (byed pa) もまた三つある。即ち、(1) 自体の特性である〈増益を排除するもの〉[の作用] によって、一つ [の認

30 *Apohasiddhi* (by Śaṅkaranandana) D 281b5. これが大バラモン *Apohasiddhi* からの引用であることは既にロオケンチェンにより指摘されている。Klo tik p. 169.22 参照。他には、Hugon 2004 p. 70, n. 109 参照。

識手段] によって成立しているものは、他 [の認識手段] によって否定されず、(2) 対象の特性である〈以前に理解されていないもの〉の作用によって、一つ [の認識手段] によって成立しているものは、他 [の認識手段] によって定立されず、(3) 把握方法 [の特性] である〈対象に対して不逸脱であるもの〉の作用によって、一つ [の認識手段] によって成立しているものと、他 [の認識手段] によって成立しているものは対立しないのである」と、派生した議論と共にお説きになっている。」

サパンによれば、大バラモンの随順者の説では、認識手段は、〈三法を有する、真実の対象を理解するもの (bden pa'i don rtogs chos gsum ldan)〉と定義される。〈真実の対象を理解するもの〉は、直前のダルモータラの説の最後の箇所、認識手段の作用であるが、定義ではないと否定されたものであるが、「三法を有する」という限定が付された形で大バラモンの随順者の説として提示されている。ダルモータラの定義に於いても三つの特性が立てられているが、その内容はこの三法とは相異なる。

(5) 第四の他説の起源について

この第四の他説は、大バラモン、即ち、シャンカラナンダナ (Śaṅkaranandana) 自身ではなく、その随順者達 (rjes su 'brang ba rnam) の見解に帰されていることにまず注意を促したい。サパンは、これ以外の三つの他説を立てるとき、ツルトゥンに引かれる前主張を依用したことは既に指摘した。ツルトゥンの論理学書には、前主張に三つの他説しか立てられていないので、サパンは新たに他説を一つ追加したことになる。そこでこの第四の他説の起源が問題となるが、実は、この大バラモンの随順者達の説として立てられた説は、ツルトゥン自身の説に他ならない。このことを以下に検証しよう。ツルトゥンは、認識手段の定義を次のように立てている。ShGr p. 69.16:

slob dpon **bram ze** dang mthun par bden pa'i don rtogs zhes bya ba yin no// 「〔認識手段の定義は,〕 尊師 [大] バラモンと一致して, 〈真実の対象を理解するもの〉と云われるものである。」

さらに, この定義中の「理解 / 理解するもの (rtogs pa)」をこう定義する。

ShGr p. 70.8-10:

de la rtogs pa'i mtshan nyid ni sngar ma rtogs pa'i don la 'dzin stangs mi 'khrul bas sgro 'dogs sel pa zhes bya ba'i ngo bo dang/ yul dang/ 'dzin stangs kyi khyad par gsum dang ldan pa'o// 「そのうち, 理解の定義は, 〈以前に理解されていない対象に対して, 把握方法が不逸脱であることにより, 増益を排除するもの〉と云われる, 自体と対象と把握方法との三つの特性を有するものである。」

ここで, この定義は三つの支分に分けられる。即ち, 〈以前に理解されていない対象〉という支分は対象の特性を, 〈・・対象に対して, 把握方法が不逸脱であることにより〉という支分は, 把握方法の特性を, 〈増益を排除するもの〉とは, 自体の特性を示している。そのような三特性によって限定された〈真実の対象を理解するもの〉が, ツルトゥンによる認識手段の定義であるが, それは, リクテルに立てられた大バラモンの随順者達による定義〈三法を有する, 真実の対象を理解するもの (bden pa'i don rtogs chos gsum ldan)〉に他ならない。しかも, ここでツルトゥンは自身の解釈を, [大] バラモンの説と一致するものと自ら述べている⁽³¹⁾。サバンは, これに基づきツルトゥンの説をバラモンの随順者達の説として立てたのであろう。理解の三特性については, ツル

31 その典拠として, ツルトゥンは, シャンカラナンダナの *Apoḥasiddhi* の偈を引用しているが, これは, リクテルにも引かれるものである。ShGr p. 70.13; RT p. 211.8 参照。しかし, それは特にこの定義を裏付ける内容とはなっておらず, またそれ以外にこの定義を支持するようなシャンカラナンダナの聖言は得られないので, これをシャンカラナンダナの見解に帰することは妥当とは思われない。

トゥン自身が後述しているが、その基本的な規定の部分だけ引いておこう。自体・対象・把握方法の特性は、順に以下のように規定されている。

(1) ShGr p. 70.15: ... 'on kyang don de la bzlog phyogs kyi sgro 'dogs sel pa zhes bya ba yin te/... 「しかしながら、[自体の特性は、] その対象に対して反対項の増益を排除するものと云われるものであり、」

(2) ShGr p. 71.7: yul gyi khyad par ni/ sngar ma rtogs pa'i don rtogs pa yin la/... 「対象の特性は、以前に理解されていない対象を理解するものであるが、」

(3) ShGr p. 71.12: 'dzin stangs kyi khyad par ni/ don la mi 'khrul ba'o// 「把握方法の特性は、対象に対して不逸脱であるものである。」

このように理解の三特性を説いた後に、その三特性に相応する理解の作用 (byed pa) もリクテルに見られるように三つ説いている (ShGr p. 72参照)。

以上の見解は、ツルトゥンの独創ではなく、先行する何らかの著作に依拠することは、認識手段と理解の定義を挙げる際に、「と云われる (zhes bya ba)」と引用符を付加していることから推察される。実際、以上の見解は、ツァンナクパの『量決訳註』に辿ることができる。本稿ではツァンナクパの認識手段論の詳細に立ち入ることは出来ないが、認識手段の定義に関する彼の基本的な見解だけを挙げておこう。ツァンナクパは、gTsang tik 16a4-24a5にかけて「定義の確認 (mtshan nyid ngos gzung ba)」という科段の下に、認識手段の定義を議論しているが、そこでは、以下のような定義を立てている。gTsang tik 16b6-8:

dang po(='dod pa'i mtshan nyid ngos bzung ba)ni slob dpon gyis rnam 'grel las ... zhes bya ba la sogs pa'i gzhung las sngar ma rtogs pa'i don rtogs pa zhes bya 'di yin no// 「第一 (= [自説として] 認められる [認識手段の] 定義を確認すること) は、尊師 (= ダルマキールティ) により、『量評釈』に於いて、・・・等の典籍に基づき、「以前に理解されていない対象を理解

するもの」と云われるものである。」

ツァンナクパは、PV II. 5c; PVin 226b3; PVin I. 3a を典拠に、このように新得性を主体とした定義を立ててから、後続の文章に於いて、「理解するもの」の三特性を順に以下のように提示している。

(1) gTsang ṭik 17a2: rtogs pa'i ngo bo ni ... don de la rang dang 'dzin stangs 'gal ba'i blo nyid sel pa'o// 「理解の自体とは、…その対象に対して自身と把握する方法が対立する智を排除するものである。」; ibid. 17a4: ... bzlog pa'i sgro 'dogs sel pa'o// 「反対 [項] の増益を排除するものである。」

(2) gTsang ṭik 17a6: yul gyi khyad par ni sngar ma rtogs pa la ste/ ... 「対象の特性とは、以前に理解されていない [対象] に対して [反対項の増益を排除するもの] である。」

(3) gTsang ṭik 17a7: 'dzin stangs kyi khyad par ni don la mi 'khrul pa'o// 「把握方法の特性とは、対象に対して不逸脱であるものである。」

ここで注目すべきは、ツァンナクパもまた、彼の定義を提示する際に、「と云われる (zhes bya)」と引用符を付加している点である。これは、ツァンナクパもまた先学の定義を借用したことを示唆する。そして、私見ではこれはチャパの定義である。チャパの論理学の著作は現在利用不可能であるので^{〔補記〕}、断片的な資料から彼の見解を再構成するしかないが、ゲルク派のジャムヤンシェーパ ('Jam dbyangs bzhad pa, 1648-1721) は、彼の『量評釈精解』(rNam 'grel mtha' dpyod) に於いて、チャパの認識手段の定義を立てているので、挙げておこう。Kun mkhyen mtha' dpyod pp. 434.18-435.1:

yang bod kyi rtog ge ba'i dbang po kha cig na re/ sngar ma rtogs pa'i don bden pa la sgro 'dogs pa'i zlog phyogs [dang] 'gal ba tshad ma'i mtshan nyid du 'dod de/ **cha bsdus** las/ ma rtogs don gyi gsal byed [ces] bya ba'i don ni/ nas/ sgro 'dogs bskyed pa'i nus pa bzlog pa ste/ de la bden pa rtogs pa zhes bya zhes gsungs/ 「また、チベットの弁証家の主の或る者 (=チャパ)

は、〈以前に理解されていない真実の対象に対して増益した反対項〔と〕対立したもの〉を認識手段の定義として認める。即ち、チャパの〔論理学〕要義（cha bsdus, i.e., cha pa'i bsdus pa）に、「『理解されていない対象を明示するもの』（PV II. 5c）と云われるものの意味は」から、「増益を生ぜしめる能力を斥けるものであり、それに対して〈真実を理解するもの〉と云われる」と説かれている。」

ここで、ジャムヤンシェーバは、チャパの要義を典拠にして「以前に理解されていない真実の対象に対して増益した反対項〔と〕対立したもの」という定義をチャパの定義として紹介している⁽³²⁾。そして、この僅かばかりの断片から読み取れることは、(1) チャパのこの定義が、PV II. 5c を典拠に立てられたものであること、即ち、無欺性ではなく新得性を主体とした定義であること、(2) 対象を理解することを、その対象の反対項の増益を排除することと規定していることの二点である。即ち、チャパは、「未知の対象を明示するもの」という一脚に対して、偈中の「対象」と云う語に「真実の」という限定を付加し、かつ、「明示するもの」を、その真実の対象を理解するものと換言し、その対象を理解するものを、対象の反対項の増益と対立するもの（＝増益を排除するもの）と定義することにより、彼の認識手段の定義を立てた。即ち、

「未知の対象を明示するもの」（PV II. 5c）→ 未知の真実の対象を理解す

32 ロオケンチェンもこれと同様の定義を、チャパの定義として挙げている。*Tshad ma rigs gter gyi phyogs snga rnam par bshad pa rigs lam gsal byed*. In: *Tshad ma rigs gter gyi 'grel pa*. Krung go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang, 1991, p. 334.9: tshad ma ni sngar ma rtogs pa'i don bden pa la bzlog pa'i sgro 'dogs dang 'gal ba'o//. 他方、チャパに帰される認識手段の定義には、これとは別系統の定義も見られる。即ち、シャーキャチョクデンとケンチェンは、bden pa'i don rtogs chos gsum ldan という定義一リクテルに於いて大バラモンの随順者達の説に帰されたもの一をチャパに帰している。Shak tik chen 298.4, 312.7; Shak tik chung 600.3; mKhan tik 264.2 参照。しかし、後述する理由によりこれはチャパ自身の定義ではないようである。

るもの → 未知の真実の対象に対して反対項の増益と対立するもの

そして、直弟子のツァンナクパは、それを踏襲し、かつ、それはツルトウンにも受け継がれたのである。但し、仔細に検討するならば、チャバとツァンナクパの定義には微妙であるが無視できない相異も見い出される。即ち、ここに挙げられたチャバの定義には、ツァンナクパとツルトウンの定義に見い出される三特性のうち、自体の特性と対象の特性の二つの特性しか見いだされないことである。チャバの定義中には、把握方法の特性である〈対象に対して不逸脱であること〉という条件が見いだせない。ここにチャバからツァンナクパの間に定義の変遷を認めることが出来るかもしれない。即ち、チャバにとっては、二特性を有する真実の対象を理解するものが、認識手段の定義であったのに対して、ツァンナクパは、それに把握方法の特性を追加して、三特性を有するものを定義として立てたという可能性である。この点についてはチャバの原典が利用できない現況では確言はできないので^[補記]、可能性として示唆しておくに留める。いずれにせよ、サパンによる「大バラモンの随順者達」の説に対する批判は、単に、嘗ての師であるツルトウンのみならず、その師であるツァンナクパやチャバに対する批判ともなっていることが確認されればよい。参考までに、リクテル・ShGr・ツァンナクパの『量決訳註』・チャバの断片資料に見られる理解の諸特性の規定を表に纏めておこう。

	Phya pa	gTsang tik	ShGr	RT
自体の特性	sgro 'dogs pa'i zlog phyogs [dang] 'gal ba	don de la rang dang 'dzin stangs 'gal ba'i blo nyid sel pa	don de la bzlog phyogs kyi sgro 'dogs sel pa	bzlog phyogs kyi sgro 'dogs sel ba
対象の特性	sngar ma rtogs pa'i don bden pa	sngar ma rtogs pa	sngar ma rtogs pa'i don rtogs pa	sngar ma rtogs pa'i don
把握方法の 特性	(not mentioned)	don la mi 'khrul ba	don la mi 'khrul ba	don la mi 'khrul ba

このように、サパンが認識手段の定義に関して、四つの他説を前主張として

立てたとき、そのうちの前三者は、ツルトウンの ShGr からの引き写しであり、最後の第四の他説「[大] バラモンの随順者達」の説は、ツルトウン自身の説であることが判明した。それ故、サパンは、確かに前主張の立て方はツルトウンに従うが、これは即座にサパンがツルトウンの随順者であることを意味するわけでない。むしろ逆に、サパンの批判の主な標的は嘗ての自分の師に他ならないと言えよう。それ故、単に、リクテルと ShGr に平行箇所が多数見出されるからといって、ツルトウンのサパンに対する影響力を過大評価すべきではない。サパンがツルトウンから距離を置いていることは、これらの前主張に対する彼らの批判の仕方に相異が見い出されることから分かる。サパンは、四つの前主張を提示した直後に、それらを順に批判している (cf. RT pp. 211.22-212.22) が、本稿では紙面の関係上、その全てを扱うことが出来ない。ここでは、そのうちのデーヴェーンドラブッディに帰される説に対する批判のみを紹介しておこう。なぜならば、そこにはサパンの前主張批判に於ける基本的な立場が見い出され、かつ、サパン自身の認識手段の定義に関する見解を考える場合、四つの他説のうち最もサパンの自説に近いデーヴェーンドラブッディの解釈との相異を明確にしておくことが必要であるからである。

3. デーヴェーンドラブッディに帰される説に対するサパンの批判

サパンは、デーヴェーンドラブッディに帰される説を以下のように批判している。RT pp. 211.23-212.3:

「[偈:] 二つの定義によって [定義対象が] 立てられるならば、その定義対象もまた二つになる。

[自註:] [無欺性と新得性の] 両者が認識手段の定義であることは妥当ではない。定義対象もまた二つになるからである。それ故、[単一の定義対象に複数の定義の] 選択肢を有するもの ('dam ka can⁽³³⁾) は有り得ない

と既に解説した。」

サパンによれば、デーヴェンドラブッディの説は、無欺性と新得性の両者を認識手段の定義と見做すものであり、先に偈中（RT p. 210.3-4）に二つに大別された他説のうちの前者、即ち、無欺性と新得性を異名（*rnam grangs*）と見做す解釈である。この解釈の問題点は、サパンによれば、認識手段という一つの定義対象に対して、二つの定義を立てる点にある。サパンは、一つの定義対象に対して一つの定義しか認めない。単一の定義対象に対して複数の定義や、逆に、単一の定義に対して複数の定義対象を設定することは出来ない。このように、定義と定義対象に一对一の対応を認める説を、〈定義と定義対象の一对一対応説〉と名付けておく⁽³⁴⁾。これが定義と定義対象の関係に関するサパンの基本的な見解であり、彼は以下のように明確に述べている。RT pp. 207.21-208.2:

「[偈:] 定義と定義対象は同数にして同一自体である。[定義は] 実有, [定義対象は] 仮有と確定される。

[自註:] 単一の定義に多数の定義対象と, 単一の定義対象に多数の定義はあり得ないので, [定義と定義対象は,] 同数であり, 分別知によって同一自体として把握されたものである。そして, 定義は実有と, 定義対象は仮有と確定される。」

このように、サパンは、定義と定義対象の一对一対応説に基づき、一つの定義対象に対して二つの同義異名の定義を認めるデーヴェンドラブッディの説を批判した。

33 ここで 'dam ka can とは, *mtshan nyid 'dam ka can/ 'dam ka can gyi mtshan nyid* (選択肢を有する定義) の意味であり、一つの定義対象に対して、複数の選択可能な定義のことを意味する。つまり、認識手段の定義として、無欺性を選択してもよいし、新得性を選択してもよいので、選択肢を有する定義であると云われる。サパンはこれを認めない。

他方、ツルトウンは、デーヴェーンドラブッディの説を批判するにあたり、二つの論拠を提示している。ShGr p. 68.18-19:

「これもまた妥当ではない。なぜならば、(1) 多数の定義により単一の定義対象が表示されることは妥当ではないと既に説示されたからであり、そして、(2) 無欺が認識手段の定義であることは、直前に既に否定されたから。」

第一の論拠は、定義と定義対象の一対一対応説に基づくものであり、これはサ

34 この定義と定義対象の一対一対応説は、現在利用可能な資料に依る限り、ツァンナクパの『量決訳註』にまで辿ることが出来る。ツァンナクパは、定義・定義対象・定義基体の三法の設定の箇所において、以下のように述べている。gTsang tik 14b4: re shig mtshan nyid gcig gis mtshon bya gnyis mtshon pa ni mi rung ste/ ... gnyis kyi cig mtshon pa mi rung ste/ ... 「まず、一つの定義により二つの定義対象が示されることは妥当ではない。・・・二つ [の定義] により一つ [の定義対象] 示されることは妥当ではない。・・・」ここでツァンナクパは、一つの定義によって二つの定義対象が示されることは妥当ではないことと、二つの定義によって一つの定義対象が示されるのは妥当ではないことを明言している。これは、一つの定義対象に一つの定義しか認めない立場、即ち、定義と定義対象の一対一対応説に他ならない。

なお、この定義と定義対象の一対一対応説を認めない論師もいる。例えば、チョムデン・リクペーレルティ (bCom ldan rig pa'i ral gri, 1227-1305) は、『論理学七部論書莊嚴華 (Tshad ma sde bdun rgyan gyi me tog)』(Tshad ma sde bdun rgyan gyi me tog. Ed. rDo rje rgyal po. Krung go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang, 1991. pp. 1-138) に於いてこの説を以下のように批判している。同書 p. 6.10-13: 「[対論者:] 定義対象である一つの認識手段に於いて、三つの定義は妥当ではない。なぜならば、二つ [定義] は、〈意味反体が他のものとなったもの (don ldog gzhan du gyur pa)〉であるからである、と云うならば、[論主:] 定義と定義対象が同数であることは、尊師達 (=ダルマキールティ等) により認められていない。即ち、『量評釈』に於いて、「認識手段とは、欺きのない知である」(PV II. 1a) と説かれており、「未知の対象の明示者もまた」(PV II. 5c) と [認識手段の] 定義が多数説かれているのである。〈意味反体が他のものになったもの〉とは、[定義の] 過失ではないと [後で] 解説しよう。」

パンにより踏襲されることになった。第二の論拠は、リクテルには見出せない。サパンは後述するように、無欺性を認識手段の定義として認めるので、この批判を受容しない⁽³⁵⁾。

以下、同様にして、サパンは他の三つの他説をも順に批判していくのであるが、その批判の論法は基本的にツルトウンのそれとは一致せず、彼自身の論法を用いている。前述したように、これらの他説を前主張に立てる際には、サパンは、忠実に ShGr を踏襲した。それにもかかわらず、それらを批判する際には、ツルトウンとは一線を画す。特に、この第四の他説は、ツルトウン自身の自説であるが、それを最後に前主張に立てて批判することにより、嘗ての師と袂を分かち、自説を宣説する。ここには、サンブ系の論理学の影響下にありつつも、そこから脱却しようとするサパンの強い意志を見て取ることが出来るのである。

4. 認識手段の定義に関するサパンの自説

このように、四つの他説を順次に批判した後で、サパンは、自説の設定の科

35 この第二の論拠については、些か注意する必要がある。ここで「直前に」とは、ダルモータラの説を批判する箇所 (ShGr pp. 65.13-68.14) を指す。ツルトウンによれば、ダルモータラは、無欺を〈対象を獲得させる能力 (don thob byed kyis nus pa)〉として定義しており、その意味での無欺性がここで認識手段の定義ではないと批判されていることは確かである。しかし、実際、ダルマキールティの『量評釈』や『量決択』には、無欺性により認識手段を規定する箇所が見い出されるので、その点を如何に会通するのが問題となる。その点に関して、ツルトウンは、ダルマキールティの著作に見い出される無欺の語義を三つに分け、自説との会通を計っている。ShGr p. 68 参照。その三義とは以下の通り。

- (1) don rnams kyis rang rang gi don byed nus pa — 典拠：PV II. 1ac; PVin I. p. 30.17.
- (2) 'dzin stangs mi 'khrul pa — 典拠：PVin I. 28ac; PVin I. p. 38.10.
- (3) gcig tu shes bya gnod med du bden pa — 典拠：PV I. 215d.

段の下に、自説を以下のように開陳している。RT pp. 212.23-213.6:

mi slu mi shes don gsal gnyis// rang mtshan rtogs par don la mthun//
tha snyad pa dang don dam pa// gnyis ka la yang gnyis po 'jug//
slob dpon **phyogs kyi glang pos** gzhung gi cha 'ga' zhig tu mi bslu ba dang
'ga' zhig tu ma shes don gsal du gsungs la/ dpal ldan **chos kyi grags pas**
de gnyis dgongs pa gcig tu mdzad nas blo de don de la mi bslu ba'i nus pa
nyid la bzhed pa yin no//

[[偈:] 無欺と未知の対象を明示するものの二つは、自相を理解する点で意味が一致している。言説と勝義〔の認識手段〕の両者に対しても、二つ(=無欺と未知の対象を明示するもの)が適用される。

[自註:] 尊師ディグナーガは、〔認識手段を、〕典籍の或る部分に於いて無欺と、或る〔部分〕に於いて未知の対象を明示するものとお説きになったが⁽³⁶⁾、吉祥なるダルマキールティは、その二つを一つの密意 (dgongs pa gcig) と為さって、その智 (= 認識手段) は、その対象 (= 自相⁽³⁷⁾) に対して欺きのない能力に他ならないとお認めになったのである。]

36 ディグナーガは、『集量論 (*Pramāṇasamuccaya*, PS)』に於いて、特に認識手段の定義を明示していない。しかし、認識手段に新得性が必要であることは、例えば、PS I. 2d-3ab に示唆されている。PS I. 2d-3ab: na ca// punaḥ punar abhijñāne, 'niṣṭhāsakteḥ, smṛtādivat/「また、繰り返し再認識する知にも〔第三の認識手段性はない。〕なぜならば、無限遡及に陥るから。想起等の如し。」この偈については、Hattori Masaaki, *Dignāga, On Perception*. Cambridge, Massachusetts, 1968, p. 24, nn. 20, 22 参照。他方、無欺性を示す偈としては、PS II. 5ab: āptavākyaṁvāṣaṁvāda-sāmānyād anumānatā/「聖者の言葉は、無欺である点で〔推論と〕共通するので、推論である。」ここでは、聖者の言葉が推論の認識手段である根拠として、無欺性が立てられている。この偈については、北川秀則、『インド古典論理学の研究―陳那 (Dignāga) の体系―』。鈴木学術財団, 1973, p. 92, n. 68 参照。

37 g-Yag ṭik p. 556.9: ... blo de don rang mtshan la mi bslu ba'i nus pa nyid la bzhed do//

ここでサパンは、無欺性と新得性の二者は、自相を理解する点で意味が一致すること、即ち、同義であることを明言している。ディグナーガの著作に於いて、或る箇所では無欺性が説かれ、或る箇所では新得性が説かれたのを、ダルマキールティは、両者を一つの密意と為して、その智、即ち、認識手段は、その対象、即ち、目的達成可能な自相に対して欺きのない能力に他ならないことをお認めになった、という。この記述からは、無欺性と新得性は共に自相を理解する点で同義であるが、実質的には、無欺性の方に比重が置かれていることが読みとれる。即ち、サパンにとっては、認識手段とは、自相としての対象に対して欺きのない能力に他ならない。そして、未知の対象を明示するものは、自相を理解する智である点で、自相に対して欺きのない智をも意味するので、結局、両者は表現こそ異なるが、意味が一致するもの (don mthun) であると解釈される。

また、サパンは、新得性を勝義の認識手段の定義に、無欺性と新得性の集合体を世俗の認識手段の定義に立てるとされるプラジュニャーカラグプタの説は批判したが、この偈の後半部に示されているように、認識手段を勝義の認識手段と世俗の認識手段に分けること自体は必ずしも否定していない。但し、サパンによれば、この無欺性と新得性の両者は、勝義と世俗の認識手段に共通して適用されると主張する点で、プラジュニャーカラグプタと相異なる。

サパンは、このように認識手段の定義を提示してから、無欺性と新得性を各々以下のように規定している。まず、無欺性については、RT p. 213.6-15:

[[偈:] 無欺は、行為対象 (las, *karman) と行為主体 (byed po, i.e., byed pa po, *kartr) と行為 (bya ba, *kriyā) の三つを本性とする。

[自註:] 即ち、(1) 何が無欺であるのか (gang mi bslu ba), (2) 何に対して無欺であるのか (gang la mi bslu ba), (3) 如何に無欺であるのか (ji ltar mi bslu ba) である。第一は、不逸脱な知が対象が存立する通りに有るならば有ると知り、無いならば無いと知ることが、無欺である。第二は、所知に対して、自相としての対象が有るならば、目的達成可能なものとし

て無欺であり、[自相としての対象が] 無いならば、目的達成不可能なものとして無欺である。第三は、[人が] 自相としての対象に対して行動を起こすならば、[その人に] 自相を獲得させることに対して無欺であり、自相が無いことによりそれに対して[人が] 行動を起こさないならば、[その自相を] 排除するもの (ldog pa po) が無いことに対して無欺である。それはまた、『量評釈』に於いて、「認識手段とは、無欺の知である。無欺とは、目的達成可能なものとして存すること⁽³⁸⁾である」(PV II. 1ac) と説かれているからである。」

ここでサバンは、無欺を、行為対象・行為主体・行為の三つの観点から規定しているが、自註中の、「何が無欺であるのか」は、行為主体の側からの無欺の規定、「何に対して無欺であるのか」は、行為対象の側からの無欺の規定、「如何に無欺であるのか」は、行為の側からの無欺の規定を表している。以上の記述のうち、特に、「[人が] 自相としての対象に対して行動を起こすならば、[その人に] 自相を獲得させることに対して無欺であること (rang mtshan thob pa la mi bslu ba)」という規定は、サバンが、無欺を〈対象を獲得させる能力 (don thob byed kyi nus pa)〉と規定するダルモータラ流の無欺の解釈を基本的に受容していることを示している。このダルモータラ流の無欺の解釈は、前述したようにツルトウンによって激しく批判されたが、その点に関して、サバンは

38 サンسكريット原語は、arthakriyāsthiti である。これを蔵訳者は、don byed nus par gnas pa と訳したが、その訳は問題を含む。まず原文にない nus pa (=samartha/sāmarthya) と云う語を補足し、かつ、sthiti と云う語を gnas pa (存する) と訳している。しかし、この sthiti と云う語は、そのような意味ではなく、ここでは確実性を意味する。即ち、目的達成に対する確実性、ないし、目的を達成することが確実であることが、無欺の意味であり、これは、認識手段に依拠して、人が行動を起こすとき、人の目的が達成されることに逸脱がないこと、必ず目的が達成されることを意味する。しかし、蔵外文献ではこの蔵訳に基づいて、無欺が解釈されるので、今は蔵訳から直訳しておく。

ツルトウンさらにはツァンナクパとは全く異なる立場に立脚している。サパンは、ダルモータラに帰される見解を批判したが、しかし、ダルモータラの無欺の解釈は自説として承認している。

また、無欺を、行為対象と行為主体の二つに結び付ける解釈は、デーヴェーンドラブッディの註釈に見い出されるものである。即ち、PVP 1b4-2a1:

「その無欺はまた、[人が] 対象を断定して [それに対して] 行動を起こすとき、対象自身の [目的達成] 能力が成立することによって、[行動を起こす者により] 意図された通りの目的 (don) を自体とする無欺が、対象の法 (yul gyi chos) である。それをそのようなものと [如実に] 理解するとき、[そのように理解する] 知の無欺が、有対象の法 (yul can gyi chos) である。それ (= 知の無欺) が有るところの [知] が無欺の知である。」

ここでデーヴェーンドラブッディは、無欺を、対象の法 (yul gyi chos, *viṣaya-dharma) と、有対象の法 (yul can gyi chos, *viṣayi-dharma) の二つに大別しており、そのうちの前者は、対象が、対象自身に対して行動を起こす者により意図された通りの目的を達成する能力を有することを意味し、後者は、そのような対象をその通りに如実に理解する知の在り方を意味する⁽³⁹⁾。

以上のように、サパンの無欺の三分類のうち、前二者は、無欺を対象と有対象の二つの点から分けるデーヴェーンドラブッディの説に、そして、第三の無欺は、無欺を対象を獲得させるものと解釈するダルモータラの説にその起源を辿ることが出来よう。

他方、新得性に関するサパンの理解は以下の通り。RT p. 213.15-22:

39 ヤクトウンは、この『量評釈細註』の一文を引用して、無欺を「有対象の無欺」と「対象の無欺」の二つに分けている。g-Yag ſik p. 556.20ff. 参照。他には、Klo ſik p. 172.8ff. にも同様の記述が見られる。他方、コランパとシャーキャチョクデンのリクテル註当該箇所にはこの分類は見出せない。

「[未知の対象を明示するもの] (PV II. 5c) もまた, [ここで]「対象」という語は, 目的達成可能な事物 (= 自相) [を意味するの] であるが, 「明示するもの」という語は, 知が, 自相としての対象を理解することなので, [無欺性と新得性の両者には] 意味に不一致はないのである。即ち, 『量評釈』に於いて,

「未知の対象を明示するものもまた, [認識手段である。] [問い:] 自体 (= 自相) の理解の後に, [生じた] 普遍の知は [認識手段性を] 獲得する。[なぜならば, 未知の対象を明示するものであるから, と云うならば,] [回答:] [否である。なぜならば,] 未知の自相に対する知が, [認識手段である] ということが意図されているからであり, というのも, [目的達成を求める者達は,] 自相を考察するから。それを有する (tadvat⁽⁴⁰⁾) 世尊は認識手段である。 (PV II. 5c-7a)」

と説かれているからである。それ故, 無欺と, 未知の対象を明示するものは, 両者共に, 事物としての対象 (don dngos po, i.e., rang mtshan) の有無を理解し, そして, それらに対して欺きがない点で意味が一致しているのである。」

以上のように, 新得性を無欺性とは別異の規定として捉えずに, 自相を理解する点で無欺性と同義と見做し, 究極的には無欺性のみを認識手段の定義として立てるのがサバンの基本的な立場である。サバンは確かに新得性を無欺性と同義と見做すが, 新得性を認識手段の定義としても, その定義の一支としても立てない。なぜならば, もし新得性を認識手段として立てるならば, 認識手段という一つの定義対象に対して, 無欺性と新得性という二つの定義があることになるが, それは, 定義と定義対象の一対一対応説に立脚するサバンによっては

40 この tadvat という語には, 類似と取る解釈と, 所有と取る解釈の二つがある。Krasser 2001 pp. 180-184参照。今は蔵訳 ("de ldan") の通りに所有の意味で訳しておく。

決して認められないものである。そもそも、その二つを認識手段の定義として認めるならば、デーヴェンドラブッディの見解と異ならないことになる。この点を理解せずに、後代のリクテルの註釈者達の中には、認識手段の定義中に新得性の規定を追加した定義を立てている者が往々にして見られるが、サバンの密意を理解していない証である⁽⁴¹⁾。

このようにサバンが無欺性を主体として認識手段の定義を立てたことは、認識手段の対立項である非認識手段の智 (tshad ma ma yin pa'i blo) の定義からも見て取れる。サバンは、非認識手段の智を以下のように定義している。RT p. 72.4-6:

「[偈:] 無欺が成立しないものが、非認識手段である (mi slu ma grub tshad ma min)。

[自註:] 非認識手段 (tshad ma ma yin pa) の定義は、〈何であれその知に於いて無欺が成立しないもの (shes pa gang la mi slu ba ma grub pa)〉と云われるものである。非牛と表示するのに、[牛の定義である]〈背肉垂れ肉 [が集まった塊]〉を否定するもの (= 背肉垂れ肉が集まった塊でないもの) [を立てることが妥当である] ように、[〈何であれその知に於いて無欺が成立しないもの〉を非認識手段の定義として立てることには、] 逸脱はないのである。」

ここで、非認識手段の智の定義は認識手段の定義の反対項であることから、サバンが認識手段の定義として無欺の知 (mi slu ba'i shes pa) を立てていることが分かるのである。ここには新得性を否定する条件は付加されていない。

41 後代のリクテルの註釈者達は、サバンの意図とは裏腹に、認識手段の定義に関して多様な解釈を与えることになる。詳細は別項を期するが、今は参考までに、後代の主だった註釈者達の立てる認識手段の定義を列挙しておこう。これは新得性の条

件を付加するか否かで大きく二つに大別される。まず新得性の条件を付加する者としては、(1) ヤクトウン・サンゲーペルの定義 "rang gi gzhal bya rang mtshan la gsar du mi bslu ba'i shes pa"(g-Yag *ṭik* p. 557.7)；(2) ロントウン・シャーキャゲルツェンの定義 "rang gi mtshan nyid sngar ma shes pa gsar du 'jal bar byed pa'i mi bslu ba'i shes pa"(Rong *ṭik* 261.2)；(3) シャーキャチョクデンの定義。シャーキャチョクデンはリクテルに対する小註と大註に於いて複数の定義を立てているが、一つを除き皆新得性の限定が付加されている。"mi slu ba dang/ gsar rtogs gnyis tshogs kyi rig pa"(Shak *ṭik* chen 307.7)；"gang bcad pa dang mthun pa'i don rang mtshan la mi bslu ba'i rig pa"(Shak *ṭik* chen 308.1)；"gzhal bya de gsar du bcad cing bcad pa dang mthun pa'i 'jug yul don rang mtshan la mi bslu ba'i rig pa"(Shak *ṭik* chen 308.1)；"bcad pa dang mthun pa'i 'jug yul rang mtshan la gsar du mi slu ba'i rig pa"(Shak *ṭik* chung 603.5)。このうち大註の二番目の定義には新得性の限定が付加されていないが、これは小註の定義と同系統なので、シャーキャチョクデンの真意としては gsar du の限定を必要としよう。

他方、認識手段の定義に新得性を付加しない者としては、コランパとケンチェン・ガワンチュータを挙げることが出来る。即ち、(1) コランパの定義 "mi bslu ba'i shes pa". Cf. Go *ṭik* chung 317.1.1: mi bslu ba'i shes pa tsam gyis tshad ma'i mtshan nyid yongs su rdzogs te/ 'di'i mi bslu ba la chos sum ldan dgos pas byed pa po'i mi bslu ba la gsar rtogs kyi don tshang ba'i phyir ro// des na gsar du zhes pa'i tshig smos mi dgos te/ de la rnam bcad med cing zlos pa'i skyon yod pa'i phyir ro//「無欺の知のみにより、認識手段の定義は完成する。なぜならば、この無欺に三法を有することが必要であることにより、行為主体の無欺には新たに理解することの意味が充足しているからである。それ故、「新たに」という語句を述べる必要はない。なぜならば、それには、断除がなく、重複説示の過失があるからである。」他には、Go *ṭik* chen 58.3.3ff. 参照。(2) ケンチェンの定義 "rang gi gzhal bya rtogs pa la mi bslu ba'i blo"(mKhan *ṭik* 268.4)。ケンチェンもコランパ同様に、gsar du という限定を付加する他のリクテルの註釈者達を批判している。mKhan *ṭik* 267.6参照。以上の諸論師の中で、無欺性のみを定義に立てるサバンの密意を最も忠実に理解していたのは、コランパとケンチェンである。但し、コランパの解釈には問題点が無いわけでもない。彼が新得性の条件を定義の一支として付加しないのは、無欺の三義のうちの行為主体の無欺に新得性の意味が充足していることによるが、それは妥当ではない。サバンが新得性の条件を付加しないのは、彼の再理解否定論による。それについては後述する。

5. 認識手段の定義に関するサパンの解釈の独自性

以上のように、サパンの認識手段の定義に関する解釈は、彼の嘗ての師であるツルトウンに対する批判を通じて形成されたものであることが判明した。ツルトウンは、無欺性を認識手段の定義として認めず、新得性を主体とした定義を立てた。これに対して、サパンは逆に新得性を認識手段の定義と認めず、無欺性のみを定義として立て、そして、新得性を認識手段の定義としてもその一支としても承認しない。サパンが、新得性を無欺性とは別に認識手段の独立した定義として認めないのは、前述したように、単一の定義対象に対して複数の定義を認めない説、即ち、〈定義と定義対象の一対一対応説〉に依拠する。他方、サパンが、新得性を定義の一支としても認めないのは、私見では、彼が再理解 (bcad shes) の存在自体を認めないことに起因する。通常、新得性の限定は、再理解を断除するためと解釈されているが、再理解を認めないならば、それを断除するために新得性の規定を付加する必要性もまた認められないからである⁽⁴²⁾。サパンのこの再理解を認めない見解を、〈再理解否定論〉と名付けておく⁽⁴³⁾。サパンはこの認識手段の定義の議論の中で、彼の再理解否定論に特に言及するわけではないが、この理論は、彼の認識手段論に於いて暗黙のうちに前提され、彼の議論を背後から支える重要な役割を担っている。このように再理解の存在を認めないサパンの立場では、再理解を断除するために新得性の規定を認識手段の定義に付加する必要はないので、認識手段の定義としては、無欺性のみを立てれば十分である。しかし、PV II. 5c に新得性の規定が明確に述べられている以上、無下にそれを否定するわけにもいかないので、それに対して会通を計る必要がある。それが、「無欺性と新得性は自相を理解する点で意味が一致する」という解釈である。このようにして、新得性は、無欺性との同義性のなかにその独立した意義を喪失することになる。〈定義と定義対象の

一対一対応説」と〈再理解否定論〉が、無欺性のみを定義として立てるサパンの認識手段の定義の設定に於いて果たす役割を確認しておこう、それは以下の通りである。

1. 定義と定義対象の一対一対応説 → 新得性を無欺性とは別に認識手段の独立した定義として立てる解釈を排除する。
2. 再理解否定論 → 新得性を認識手段の定義の一支として立てる解釈を排除する。

このようなサパンの解釈は、果たして、ダルマキールティの密意を忠実に反映したものであろうか。ここではダルマキールティ自身の認識手段に対する解釈の詳細には立ち入らないが、今は新得性の必要性に話題を限定してダルマ

42 もし、〈無欺の知〉を認識手段の定義として立てるならば、再理解も無欺の知であり、それ故、認識手段であることになるという過失があるので、それを断ずるために、新得性の条件が付加される必要があるというのが、この議論の前提である。例えば、前述したように、ツァンナクパが、莊嚴著者の説を立てる際に、世俗の認識手段の定義として、無欺性のみではなく、無欺性と新得性の集合体を立てたのは、無欺性のみでは、再理解が世俗の認識手段となる過失があるためであった。実際には、『量評釈莊嚴』には無欺性のみが世俗の認識手段の定義として立てられているのであるが、ツァンナクパがあえてそれに新得性の規定を追加したのは、当時の一般的理解として、再理解は無欺の知であることが認められていたからである。そして、サパンもそれを前提としている。例えば、サパンが、大バラモンの説を批判する際に、対象の特性〈未理解の対象〉という限定に断除がないと述べているのは、この限定により再理解が断除される必要性を認めない理由による。RT p. 212.14f. 参照。後代のゲルク派でも、一般に、再理解を断除するために、PV II. 5c に基づいて、gsar du (新たに) という限定を付加し、gsar du mi slu ba'i shes pa を定義として立てる。インドに於いても、例えば、マノーラタナンディンは、PV II. 5c の註釈に於いて、世俗知 (= 再理解) を断除するために新得性の規定が導入されたことを認めている。*Pramāṇavārttikavṛtti* (Ed. S. D. Shastri. Varanasi, 1984) p. 8.8-19 参照。

43 サパンの再理解批判は、リクテルの第二章 (RT pp. 67.23-72.1) に見い出される。福田1990 pp. 45-50 参照。

キールティの理解を検討しておこう。PV II. 3ab に於いて、既にダルマキールティはこう述べている。PV II. 3ab :

grhītagrahaṇān neṣṭaṃ sāmṃvṛtaṃ ... 「〔既に〕 把握されたものを〔再度〕
把握するので、世俗〔知〕は〔認識手段として〕認められない。」

ここで、既に把握されたものを再度把握する世俗知とは、後代の用語では再理解 (bcad shes) に相当する。ダルマキールティは、ここでこの世俗知が認識手段であることは否定しているが、サパンのように、その存在自体を否定しているわけではないので、この点で両者は異なる立場に立脚していることが分かる。また、筆者の知る限り、ダルマキールティが、〈定義と定義対象の一対一対応〉に言及することはなく、認識手段に二つの定義を立ててもダルマキールティの体系に於いて特に支障を来すとも思われない。このようにサパンの認識手段の定義に関する議論を背後から支える〈定義と定義対象の一対一対応説〉と〈再理解否定論〉は、ダルマキールティの体系の中には全く見出せない要素である。このように、サパンとダルマキールティとでは、認識手段の定義を論ずる際に依拠する前提自体に相異がみられ、その意味で、サパンの解釈はダルマキールティの密意を忠実に再現したものではなく、サパン独自のものであると言えよう。そもそも、管見によれば、この二つの理論はチベットに於いて成立したもので、インド原典にその起源を辿ることが出来ない。その点を簡単に検討しておくならば、まず、〈定義と定義対象の一対一対応説〉は、定義と定義対象の設定 (mtshan mtshon gyi rnam gzhag) を前提としているが、この設定自体が、その萌芽はインドに辿れるとしても、チベットに於いて確立し洗練化されたものであり、特にサンブ系の論師により盛んに議論された主題である。前述したように、〈定義と定義対象の一対一対応説〉は現在利用可能な資料に依る限りツァンナクパの『量決択註』にまで辿ること出来る。果たしてツァンナクパがこの説の創始者であるのか、あるいは、チャバ等の先行する論師に遡ることが出来るのかは資料的な制約の故に不明であるが、少なくとも、サンブ

系の論理学にその起源があることにはほぼ間違いなからう。

他方、〈再理解否定論〉は、恐らく、サバンの独創であると思われる。再理解を含めて五つの非認識手段の智——顕現不確定知 (snang la ma nges pa'i blo)・再理解 (bcad pa'i yul can/bcad shes/ dpyad shes)・誤知 (log shes, mithyājñāna)・憶測 (yid dpyod)・疑念 (the tshom, saṃśaya)——を立てるのは、サンプ系の論理学の特徴であり⁽⁴⁴⁾、〈再理解否定論〉の起源をサンプ系の論理学に辿ることは出来ない。他方、これはインド起源でもなからう。再理解に相当する世俗知をダルマキールティは認めていたし、彼の随順者達もそれを踏襲していたことを否定する典拠は現在のところ見いだせない。実際、再理解それ自身がダルモッタラの著作に確認できるのである⁽⁴⁵⁾。ちなみに、サバンは再理解のみならず、顕現不確定知と憶測をも独立した非認識手段の智として立てない⁽⁴⁶⁾。

44 これは、ゴク翻訳官にまで遡ることが出来る。rNgog dka' 'grel p. 32.19: des na tshad ma ma yin pa'i blo lnga'o// snang la ma nges pa dang/ bcad pa'i yul can dang/ log pa'i shes pa dang/ yid dpyad dang/ the tshom rnams ni/ tha snyad pa'i yongs su gcod byed ma yin pas so//.「それ故、非認識手段の智は五つある。即ち、(1) 顕現不確定と、(2) 理解された対象を有するものと、(3) 誤知と、(4) 憶測と、(5) 疑念は、言説の断定者でないからである。」Hugon 2004 p. viii, n. 6 参照。

45 従来、この再理解のサンスクリット原語は確認されておらず、チベット起源と疑われてきたが、筆者はダルモッタラの『正理一滴註』にその原語を見出した。Nyāyabinduṭīkā(In: Dharmottaraśāstra. Ed. D. Malvaniā. 2nd. ed. Patna, 1971)p. 19.4: ato 'dhigataviṣayaṃ apramāṇam/ = Tib. D 38a1: de bas na bcad pa'i yul can ni tshad ma ma yin no//「それ故、理解された対象を有するものは、認識手段ではない。」再理解は、後代 bcad shes/ dpyad shes と表記されるが、サンプ系の初期の論理学書では、bcad pa'i yul can と表記されるのが常である。この原語はここに見られる adhigataviṣaya に他ならない。

46 RT pp. 61-72参照。そこでサバンは、不理解 (ma rtogs pa)・誤分別 (log rtog)・疑念 (the tshom) の三つしか非認識手段の智として立てない。福田1990 pp. 34-50 参照。

以上、認識手段の定義に関するサパンの解釈の特徴について検討してきたが、纏めるならば、以下のようなだろう。

1. 無欺性（＝無欺の知）のみを認識手段の定義として立て、新得性をその定義ないし定義の一部としても承認しないこと。
2. 無欺性と新得性を、自相を理解する点で同義と見做すこと。

そして、このようなサパンの解釈を背後から支える理論が、彼の〈定義と定義対象の一対一対応説〉と〈再理解否定論〉である⁽⁴⁷⁾。

最後に、この認識手段の定義の議論から読み取れた、サパンが前提とする二つの論理学の相承に対するサパンの基本的な立場を確認しておこう。前述したように、サパンの論理学には、主にサンプ系の論理学⁽⁴⁸⁾とシャーキャシュリーバドラ直伝の論理学の二つの流れが入っているが、その両者に対するサパンの立場は、決して単純なものではない。従来サパンの思想的立場については二つの大きな解釈があった。一つは、シャーキャシュリーバドラ等からサパンがサ

47 〈定義と定義対象の一対一対応説〉と〈再理解否定論〉という二つの論拠に依拠して、無欺の知のみを認識手段の定義に立てるのは、サパンの独創であるが、単に、無欺の知のみを定義と立てることや、無欺性と新得性を同義と見做すこと自体は必ずしもサパンの独創とはいえない。その詳細については、別稿に委ねたい。

48 ここで、サンプ系の論理学とは、サンプ僧院を活動の中心とした学僧達に継承発展された論理学の伝統の総体を意味する。それはゴク翻訳官に始まり、その弟子達により展開された。但し、一口にサンプ系の論理学といっても、サンプの諸論師に間には往々にして大きな解釈の相違がある—例えばゴク翻訳官とツァンナクパは認識手段の定義に関して全く相違する立場を取る—ので、その内部にも多数の細かい相承が見い出される。それ故、サパンが、サンプ系の論理学を批判したといっても、サンプの諸学僧のうち、如何なる主題に関して誰の解釈を批判しているのかという点を文献に即して具体的に実証することが肝要である。それを通じてのみ、サパンの論理学に対するサンプの論師達の影響、さらには、サパンの論理学の独自性を明らかにすることが出来るのである。

ンスクリットを通じてダルマキールティの論理学を学んだことから、サバンをインド原典に忠実な解釈を取り、サンプ系の論理学をそれから逸脱したものとして激しく批判した者と見做す解釈であり、他方は、その反動として、リクテル自註には、ツァンナクパの『量決訳註』やツルトウンの ShGr との多数の平行箇所が見い出されることを理由に、サバンは、科段や前主張の設定のみならず、その主張に至るまで、サンプ系の論理学の強い影響下にあったと見做す解釈である⁽⁴⁹⁾。この二つの解釈は何れもサバンの立場を正確に捉えたものではない。サバンは、確かに、この認識手段の定義の議論に於いて、その科段や前主張の設定に関しては、ツルトウンの ShGr を依用しているが、しかし、前主張に対する論難の仕方はツルトウンとは一線を画し独自の論法を用いている。しかも、ツルトウンの自説を最後に前主張に立てて批判しているので、その意味でサバンはツルトウンの随順者ではなく、両者の認識手段の定義も全く異なるものである。ここでは、サバンにとり、ツルトウン、さらには、ツァンナクバやチャバは、あくまで批判の対象であった。しかし、他方において、サバンは、サンプ系の論理学を全く受け入れないわけでもなく、〈定義と定義対象の一对一对応説〉等、サンプ系の論理學説でも自説として認められるものは受け入れているので、必ずしも、サンプ系の論理学に対して一貫して批判的であったともいえない。

また、インドの論理学に対するサバンの立場も単純ではない。サバンは決してインドの論師達の忠実な随順者ではなく、前主張に立てられたデーヴェーン

49 例えば、Pascale Hugon は、ツァンナクパの『量決訳註』、ツルトウンの ShGr、サバンのリクテルに多数の平行文が見い出されることを指摘し、直接知覚の認識結果 (pramāṇaphala) の議論から、その一例を挙げている。Hugon 2004 pp. xii-xiv 参照。そして、サバンが論述の進め方に関して、gTsang ṭik や ShGr を依用していることを根拠に、多くの場合に於いて、サバンの思想的立場は、彼に先立つサンプ系の諸論師の見解と異ならないことを主張している。Hugon 2004 pp. xiii, xv 参照。

ドラブッディ等のインドの大学僧達の説を批判している。認識手段の定義を立てるに際しても、〈定義と定義対象の一対一対応説〉と〈再理解否定論〉という非インド起源の論理を使用しており、ダルマキールティの見解とも実質的に相異なるものとなっている。

サバンは、一方に於いて、シャーキャシュリーバドラ等から受け継いだサンスクリット原典に基づく知識に依拠して、サンプ僧院の先学達の論理学的解釈を批判し、おそらくは、自身をディグナーガやダルマキールティの論理学の正当な継承者と位置づけようとした。しかし、実質的には、彼の論理学には、独自の変容を見せるサンプ系の論理学の痕跡や、さらには、それまでインドにもチベットにも見い出されなかった彼独自の解釈が見い出されるのである。つまり、サバンは、当初はサンプ系の論理学の強い影響下にあったが、インドの学匠との出会いにより、その影響下から出て、彼独自の学系を打ち立てるに至ったのである。

これに関連して、サバンのインド原典理解について一言述べておこう。実際、論理学のサンスクリット原典に対するサバンの理解の質と量が如何なるものであったかは改めて検討されるべき課題である。伝記資料によれば、サバンは、シャーキャシュリーバドラ及び彼の随従達に就いて、デーヴェーンドラブッディとプラジュニャーカラグプタの『量評釈註』、ダルモットタラの『量決訳註』を原典から学んだとされるが、リクテルに立てられたこの三者の前主張は、単に、ShGr からの引き写しに過ぎず、サバンがそれらの原典を確認した痕跡は全くない。また、既に検討したように、その前主張に立てられた説は、必ずしも彼らの説を忠実に再現したものではなく、特にダルモットタラに帰された第三の他説は、実際にはゴク翻訳官の説であり、ダルモットタラの『量決訳註』に見出せないものであるが、サバンはそれに全く気付いていない。サバンの原典理解がどの程度のものであったかは、リクテルに見い出される記述を絶えずインド原典に立ち返って確認する作業を繰り返すことにより、厳格に検証され

るべきである。このように、サンプ系の論理学とインド系の論理学に対するサバンの立場は複雑に入り組んでいるので、サバンの論理学を分析するに際しては慎重な文献学的作業が要される。

結語

サバンの認識手段論に関して、本稿に於いて解明された主要な諸点は以下の通りである。

1. サバンは、認識手段の定義に関する前主張として四つの他説を立てたが、そのうち、前三者はツルトウンの ShGr からの引き写しである。それらは、元来、ツァンナクパの『量決訳註』に前主張者の名称なしに立てられたものであるが、それらに対して、ツルトウンが ShGr に於いてインドの論師名を比定し、それをサバンがそのままリクテルに前主張として引き写した。

2. サバンは、前主張の立て方は ShGr を踏襲するが、但し、前主張を批判する論法は基本的にツルトウンとは一線を画し、独自の立場から批判している。

3. 第三の他説、即ち、ダルモータラに帰される説は、実際にはダルモータラ自身の説ではなく、ゴク翻訳官の説である。その説は、サバンによって批判されるばかりでなく、ツルトウンとツァンナクパによっても批判されている。但し、その批判の仕方は全く異なり、ツルトウン及びツァンナクパが、主にその無欺の解釈を批判したのに対して、サバンは無欺の解釈に関しては、ゴク翻訳官及びダルモータラの解釈、即ち、「対象を獲得させる能力」という解釈を受け入れている。

4. 最後の第四の他説、即ち、大バラモンの随順者に帰される説は、ツルトウン自身の説である。サバンは、自身の認識手段論を設定するに際して、自身の論理学の師であるツルトウンの ShGr を、前主張の設定の仕方や科段の構成等に関して最大限依用しつつも、最終的にはツルトウンの説を前主張に立てて否

定している。その意味でツルトゥンこそがサバンによる最終的な批判の標的である。このツルトゥンの説は、彼独自の解釈ではなく、ツァンナクバ、さらにはチャパの解釈を踏襲したものである。サバンの批判は、事実上、ツルトゥンのみならず、その師であるツァンナクバやチャパにも向けられている。

5. サバンは、無欺性と新得性の二つを、自相を理解する点で同義と見做すが、認識手段の定義としては無欺の知のみを立て、新得性は、その定義としても、その定義の一部としても立てない。そして、その解釈を背後から支える理論が、〈定義と定義対象の一対一対応説〉と〈再理解否定論〉の二つである。この点に認識手段の定義に関するサバンの解釈の独自性を見い出すことが出来る。

文献表

原典：

- | | |
|--------------|---|
| CWS | <i>The Complete Works (gsun 'bum) of gSer-mdog Pan-chen Śākya-mchog-lan: Reproduced from the unique manuscript prepared in the 18th century at the order of Rje Sakya-rin-chen, the 9th Rje Mkhan-po Bhutan preserved at the Monastery of Pha-jo-sding 'og-min-gnis-pa. 24 vols. Reprint. Ed. Nagwang Topgyal. Delhi, 1995.</i> |
| D | <i>sDe dge Tibetan Tripiṭaka bsTan 'gyur — preserved at the Faculty of Letters, University of Tokyo. Tshad ma 1-20. Eds. J. Takasaki, Z. Yamaguchi, Y. Ejima. Tokyo, 1981-1984.</i> |
| Go ṭik chen | Go rams pa bsod nams seng ge, <i>Tshad ma rigs pa'i gter gyi dka' ba'i gnas rnam par bshad pa sde bdun rab gsal zhes bya ba bzhugs so.</i> In: SKB Vol. 12. pp. 1-167. |
| Go ṭik chung | Go rams pa bsod nams seng ge, <i>sDe bdun mdo dang bcas pa'i dgongs pa phyin ci ma log par 'grel pa tshad ma rigs pa'i gter gyi don gsal bar byed pa zhes bya ba bzhugs so.</i> In: SKB Vol. 11. pp. 291-365. |
| gTsang ṭik | gTsang nag pa brtson 'gros seng ge, <i>Tshad ma rnam par nges pa'i ṭi ka legs par bshad pa bsodus pa zhes bya ba.</i> 知識論決択広註善釈要集(大 |

- 谷大学所蔵西藏蔵外文献叢書), 臨川書店, 1989.
- g-Yag ṭik g-Yag ston sangs rgyas dpal, *sDe bdun gyi dgongs 'grel tshad ma rigs pa'i gter gyi de kho na nyid gsal bar byed pa rigs pa'i 'od stong 'phro ba zhes bya ba bzhugs so*. In: *dPal ldan sa skya pa'i gsung rab*. Vol. 16 (tshad ma). Mi rigs dpe skrun khang and mtsho sngon mi rigs dpe skrun khang, 2004. pp. 420-700.
- Klo ṭik Klo bo mkhan chen bsod nams lhun grub, *Tshad ma rigs pa'i gter gyi 'grel pa rnam bshad rigs lam gsal ba'i nyi ma*. In: *Tshad ma rigs gter gyi 'grel pa*. Krung go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang, 1991. pp. 1-262.
- Kun mkhyen mtha' dpyod 'Jam dbyangs bzhad pa'i rdo rje ngag dbang brtsun 'grus, *Tshad ma rnam 'grel gyi mtha' dpyod thar lam rab gsal tshad ma'i 'od brgya 'bar ba las le'u dang po'i mtha' dpyod blo gsal mgul rgyan skal bzang 'jug ngogs bzhugs so*. Mundgod: Drepung Gomang Library, 2002.
- mKhan ṭik mKhan chen ngag dbang chos grags, *Tshad ma rigs pa'i gter gyi dgongs don gsal bar byed pa'i legs bshad ngag gi dpal ster zhes bya ba bzhugs so*. In: *The Collection Works of mKhan-chen Ngag-dwang chos-grags*. Vol. 1. Darjeeling: Sakya Choepheling Monastery, 2000.
- PV Dharmakīrti, *Pramāṇavārttika*. Ed. Yūsho Miyasaka. インド古典研究 Acta Indologica 2 (1971/72). pp.1-206. [備考:] 宮坂校訂本の第一章, 二章, 三章は, 本稿では, それぞれ第二章, 三章, 一章に相当する。
- PVin Dharmakīrti, *Pramāṇaviniścaya*. D 4211 (ce. 152b1-230a7).
- PVin I. Dharmakīrti, *Pramāṇaviniścaya* Chap. I. (Prayakṣa): Tilmann Vetter, *Dharmakīrti's Pramāṇaviniśyayaḥ, 1. Kapitel: Pratyakṣam. Einleitung, Text der tibetischen Übersetzung, Sanskritfragmente, deutsche Übersetzung*. Wien, 1966.
- PVinṬ Dharmottara, *Prāmāṇaviniścayaṭīkā*. See Steinkellner/Krasser 1989.
- PVBh Prajñākaragupta, *Pramāṇavārttikabhāṣya: Pramāṇavārttikabhāṣhyam or Vārttikālamkāraḥ of Prajñākaragupta, Being a Commentary on Dharmakīrti's Pramāṇavārtikam*. Ed. Rahula Sāṅkrītyāyana. Patna, 1953. Cf. Ono 2000.
- PVP Devendrabuddhi, *Pramāṇavārttikapañjikā*. D 4217 (che 1b1-326b4).
- rNgog dka' 'grel rNgog blo ldan shes rab, *Tshad ma rnam nges kyi dka' gnas rnam bshad*. 1st ed. Krung go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang, 1994.

- rNgog rnam thar Shākya mchog ldan, *rNgog lo tstsha ba chen pos bstan pa'i ji ltar bskyangs pa'i tshul mdo tsam du bya ba ngo mtshar gnam gyi rol mo zhes bya ba bzhugs so*. In: CWS Vol. 16 (ma). pp. 443-456.
- Rong ṭik Rong ston shākya rgyal mtshan, *Tshad ma rigs pa'i gter gyi rnam bshad nyi ma'i snying po zhes bya ba*. In: *The Collected Works of Rong ston shak kya rgyal mtshan*. Vol. A (ka). Sa skya rgyal yongs gsung rab slob gnyer khang, 1999.
- RT Sa skya paṇḍita Kun dga' rgyal mtshan, *Tshad ma rigs gter*. Ed. rDo rje rgyal po. 2nd ed. Mi rigs dpe skrun khang, 1989 (1st ed. 1988). pp. 1-401.
- Shak ṭik chen Shākya mchog ldan, *Tshad ma rigs gter gyi dgongs rgyan rigs pa'i 'khor los lugs ngan pham byed ches bya ba bzhugs so*. In: CWS Vol. 10 (ta). pp. 1-587.
- Shak ṭik chung Shākya mchog ldan, *Tshad ma rigs pa'i gter gyi rnam par bshad pa sde bdun ngag gi rol mtsho zhes bya ba bzhugs so*. In: CWS Vol. 19 (dza). pp. 447-749.
- ShGr mTshur ston gzhon nu seng ge, *Tshad ma shes rab sgron ma*. See Hugon 2004.
- SKB Sa skya bka' 'bum [sDe dge edition]: *The Complete Works of the Great Masters of the Sa skya Sect of the Tibetan Buddhism*. Ed. bSod nam rgya mtsho. Tokyo: The Toyo Bunko, 1969.

第二次文献：

- Hugon 2004 Pascale Hugon, *mTshur ston gzhon nu seng ge: Tshad ma shes rab sgron ma*. Wien, 2004.
- Jackson 1987 David Paul Jackson, *The Entrance Gate for the Wise (Section III): Sa-skya Paṇḍita on Indian and Tibetan Tradition of Pramāṇa and Philosophical Debate*. 2 vols. Wien, 1987.
- Krasser 2001 Helmut Krasser, *On Dharmakīrti's Understanding of pramāṇabhūta and His Definition of pramāṇa*. WZKS 45 (2001). pp. 173-199.
- Ono 2000 Ono Motoi, *Prajñākaraguptas Erklärung der Definition gültiger Erkenntnis (Pramāṇavārttikālamkāra zu Pramāṇavarttika II. 1-7)*. Vol. 1. Wien, 2000.

- Steinkellner/Krasser 1989 Ernst Steinkellner and Helmut Krasser, *Dharmottaras Exkurs zur Definition gültiger Erkenntnis im Pramāṇavinīścaya (Materialien zur Definition gültiger Erkenntnis in der Tradition Dharmakīrtis 1)*. Wien, 1989.
- Kuijp 1989 Leonard W. J. van der Kuijp, *An Introduction to Gtsang-nag-pa's Tshad-ma rnam-par nges-pa'i ṭi-ka legs-bshad bsduṣ-pa: An Ancient Commentary on Dharmakīrti's Pramāṇavinīścaya*, Otani University Collection No. 13971. Rinsen Book Co., 1989. Cf. gTsang ṭik.
- Kuijp 1993 Leonard W. J. van der Kuijp, *Two Mongol Xylographs (Hor Par ma) of the Tibetan Text of Sa skya Paṇḍita's Work on Buddhist Logic and Epistemology*. Journal of the International Association of Buddhist Studies 16.2 (1993). pp. 279-298.
- 福田1990 福田洋一, 『チベット論理学研究 第二巻: サキヤ・パンディタ著『正しい認識手段についての論理の宝庫』第二章「意識」テキスト・和訳・注解』, Studia Tibetica 19. 東洋文庫, 1990.

補記: 本稿脱稿後に, 中国の四川民族出版社から, カダム派の纏まった著作集が出版されたことを知った。即ち, *bKa' gdamgs gsung 'bum phyogs bsgriṅs bzhugs so*. Comp. dPal brtsegs bod yig dpe snying zhib 'jug khang. Vol. 1-30. Si khron mi rigs dpe skrun khang, 2006; Vol. 31-60. Si khron mi rigs dpe skrun khang, 2007.

この著作集には, 従来利用不可能であったチャパの論理学書を含むサンプ系の貴重な論理学書が多数含まれているが, 本稿に於いては, これらは残念ながら利用できなかった。これらの資料に基づく研究については機会を改めたい。

なお, 紙面の関係上, 先行研究への言及は必要最低限に留めざるを得なかったことを付言しておく。